

地底戦車の怪人

海野十三

青空文庫

この物語は、西暦一千九百五十年に、はじまる。

すると、昭和の年号でいって、昭和二十五年にあたるわけである。

今年は、昭和十五年だから今から、丁度十年後のことだ、ちようどと思っ
ていただきたい。 作者しるす

極南へ

アメリカの貨物船アーク号は、大難航をつづけていた。

船は、あと一日で、目的の極地へつくはずになっていたが、あいにく今になって、猛烈な吹雪ふぶきに見舞われ、船脚ふなあしは、急にがたりとおちてしまった。この分では、とても、あと一日で、めざす極地の新フリスコ港に入るのはむずかしくなった。

なにしろ、極寒ごっかんの地帯における吹雪ときたら、そのものすごいことは、ちよつと形容のことばが見つかからないくらいだ。

時は今、極地一帯は、白夜といって、夜になっても太陽が沈まないで、ぼんやり明るい光がさしているのであったが、とつぜん一陣の風とともに、空は、墨すみをながしたように、まっくらになり、とたんに天から白いものがおちだしたかと思うと、まもなくあた

りは白壁の中にぬりこめられたようになって、すぐ前にいる水夫の姿が、全く見えなくなり、階段がどこにあったか、ロープがどこに積んであったか、わけがわからなくなる。

帆ほばしらは、今にも折れそうに、ぎちぎち鳴りだすし、舷ふなばたを、小さく砕かれた流水がまるで工場の蒸気ハンマーのように、はげしい音をたてて叩たたきつづけるのであった。

船長フリーマンは、船橋で、一等運転士のケリーと、顔を見合せた。

「おい、一等運転士。これは一体、どうするね」

「は、船長。風向きは幸い北西ですから、当分このままに流されていったら、どうでしょうか」

「まあ、そんなところだろうな。だが、新フリスコ港につくのがいつになるやら、見当がつかなくなつた。とにかく、今すぐに、無電で新フリスコ港へ連絡してみなさい」

「は、リント少将を、呼びだしますか」

「それがいいだろう。少将は、明日この船が到着することを、いくども念を押していたから、すこしは叱しかられるかもしれないぞ」

「はい、やってみましょう、ともかくも……」

無電は、新フリスコ港にこの船を出迎えに来ているリント少将につながれた。

「なに、船がおくれる。こつちへ到着するのは、二日のちか三日のちか、見当がつかないって。冗じょうだん談じゃないよ。それじゃ万

事、めちやくちやだ。どうするつもりだ」

「さあ、よわかりましたな」

と、一等運転士は返事をしたが、少将のつよい語気に、すこしむつとした。本船は今、難破もしかねないような吹雪の中に、やむをえず、ぐんぐん流されていくのだ。ひとの気にもなってみないで、いうことばかりいうと、むかむかしてくるのを、やつとおさえ、

「なにしろ、ひどい吹雪で、人力では、どうにもなりません。先が見えないのですから、いつ流水へさぎに舳へさぎをくだかれるか、わかつたもんではないのです」

「困ったなあ。汽船なんか、旧時代の遺物だね。潜水艦などは、

大吹雪も平気で、どんどんこつちへついているんだ。君では、話にならない。船長をよんでくれたまえ」

「はあ、船長ですね」

船長が代つて、電話をきいた。

「一等運転士のいうとおりですよ、全くどうにもなりません」

「船長の見込みでは、アーク号は、いつ到着するのかね」

「全く、わかりません。天の神様にでも、うかがってみなくてはなりません」

「おい、子供にお伽ときばなし噺ばなしをしているんじゃないよ。はつきりし

てくれたまえ、はつきり。こつちは、アメリカ連邦の興廃について、責任を感じているんだからな」

「でも、こればかりはどうも」

「では、仕方がない。こつちから、別の汽船か軍艦を迎えにやることにしよう」

「それは、どうも。迎えていただいても、貨物の積みかえにはどうにもなりませんよ」

「そうだ、その船につんでいる貨物が、明日中にこつちへ到着しないと、せつかく二年間を準備に費した大計画が、水の泡あわになつてしまうのだ」

少将の声は、気の毒なほど、悄しよげ気いげていた。一体リント少将は、アーク号の積荷の、どんな品物を待ちわびているのであろうか。

むめいとおつげきたい
無名突撃隊

アーク号の船内に、「船長の許可なくして入室を禁ず」と貼^はり紙をした部屋があつた。中では、わあわあと、元気な人の声がしていた。

「ゲームは、おれの勝だ。あとは誰かと入れかわろう」

「中尉どの、わしが出ます」

「おう、ピート一等兵か。お前、やるのか。めずらしいのう」

「いや、さすがに気長のわしも、もうこの部屋の生活には、あき

あきしましたので、なにかかわったことをしたいというわけです」
「あははは、ピートが、とうとう陥落かんらくしたぞ。この部屋のろを呪わ
ない者は、一人もなくなつたよ、あははは」

カールトン中尉が、大きなこえで、笑いだした。

「全く、永い航海だ。外は見えないし、新聞も来ないし、そして
このとおり波にゆすぶられ通しでよ、これであきあきしなかつた
ら、どうかしているよ」

「そういえば、今日は、ばかに揺れるじゃないか。そして、すこ
し冷えるようだね」

三十人ばかりのアメリカ陸軍の将兵が、スチームのむんむんす
る部屋で、トランプにうち興じているのであつた。

彼等は、籠かごの鳥にひとしかつた。いや籠の鳥なら、籠の外ひに陽がさしているのも見えるし、猫が窓のところを通るのも見えることがあつた。しかし、この無名突撃隊の隊員たちには、船内をぶちぬいた教室以外には、少しも外の様子が見えないようになっていたのであつた。船腹に、窓がついていたけれど、この窓さえが、外から、かたく眼ばりをされてあつた。まるで、重大犯人を護送していくようなものしさがあつた。

ピート一等兵は、この部隊の人気者だつた。彼は、一番年少の十九歳であつたし、そのうえ、彼はなかなか我慢がまんづよく、そしてふだんは黙り屋であつたけれど、どうかすると、鼻をぶりぶりど、ラツパのようにならして、軍歌や流行唄はやりうたなどをふいてみせた。

出港以来、一番たくさんのページをつかつて、こくめいに日記をつけているのも、このピート一等兵であつた。

「ねえ、中尉どの。もういいころじやありませんか。いってくださいよ」

低いこえで、中尉の袖をそでひいたのは、パイ軍曹だつた。彼は、一行中の巨人であつた。日本でいえば、相撲すもうの大関格ぐらいのからだの所有者だつた。

「なにをいうんだ。おれが知っているくらいなら、もうとつくの昔に、お前たちに話をしてやったよ。上陸してみないことには、なんにも分らないんだ」

「どうもへんですな。隊長が、われわれの隊の任務について全然

知らないというのは、どうもふにおちませんよ。どうかいつてく
ださい。われわれは、どんなことをきかされても、尻込みしりごみをしま
せんよ。国家へ忠誠をちかいます」

「知らないんだ、本当に」

「ほんとですか。戦車兵が、船にのる場合はどんな任務のもとに
おかれるのでしょうか。それを考えてみてください。私だけに、
そつといつてくださってもよろしいんですよ。私は、誰にも洩もら
しませんから。それなら、いいでしょう」

「だめだ。ほんとにわしは知らないのだ。いうときには、皆にい
うよ。だってそうじゃないか。中尉だの一等兵だのという区別は
あるが、無名突撃隊の一員であることについては、すこしもかわ

りがないのだからなあ」

パイ軍曹は、もう口を開こうとはしなかった。だが、彼は、腹の中で舌うちをしていた。

(どこまで強^{ごうじょう}情な中尉だろう。よし、今にみておれ。のつぴきならぬ何かをつかまえて、これでも話をせぬかと、ぎゆうぎゆういわせてやろう)

カールトン中尉は、パイ軍曹の横顔をちらりと見て、さりげなく煙草^{たばこ}の煙をふーっと吹いた。

「食事です。食事を入れます」

高声器から、へんななまりの、子供のこえが聞えた。

「おい、皆、そこでストップだ。食事をやっからにしよう」

「よし来た。今日は、どうか、陽^ひなたくさいほうれん草のスープは、ねがいさげにして……」

「おいよろこべ」

「なんだ、例のスープか。セロリが入っているんだろう」

「いいや、陽なたくさいほうれん草のスープだよ」

「うわーッ」

氷山

アーク号は、全機関に、せい一杯の重油をたたきこんで、全力をあげて吹雪の中を極地へ近づこうと、大骨を折っていた。

だが、それはほとんど無駄骨に近かった。船はうまい具合に、前進をはじめたかと思うと、またどんどんと後方へ押し戻されて、思うように前進ができなかった。

あまつさえ、アーク号の危険は、刻一刻とせまってきたようであつた。なにしろ、前が見えないのに、どんどん進んでいくのだから、まるで眼の見えない人が、杖つえなしで、崖がけのうえをはしつていけるようなものであつた。

船橋に立つて、外がいとう套えりの襟えりをたて、波のしぶきを見つめている船長と一等運転士の顔は、生きた色とてなかつた。

「船長。これはもうだめですね」

「うん、だめなことはわかっている」

「ばかばかしいではありませんか。リント少将には、なんとかあとでいいわけをすることにして、せめて吹雪のやむまで、船を流すことにしては」

「もう、それは、おそい。リント少将は、大きな賭かけをしているのだ。大アメリカ連邦のために、この大きな賭をしているのだ。われわれもまた、この大きな賭に加わらなければならない。なぜならば……」

「あつ、船長、冰山が……」

「うん、しまった。——無電で、リント少将へ……」

船長の、悲痛なさけびがおわるか終らないうちに、船の舳へさきに、とつぜん山のような氷のかたまりがゆらぐのが見えた。とたんに、大音響とともに、船上にいた乗組員たちは、いつせいに、ばたばたとたおれた。

警けいてき笛ふえが、はげしく鳴った。

アーク号は、めりめりと音をたてて冰山のうえにのしあげた。

機関がさけたのであろうか、舷げん側そくから、白いスチームが、もうもうとふきだした。

「全員、甲板かんばんへ！」

吹雪する甲板に、乗組員はとびだした。たたきつけるような氷の風だった。たちまち四五人が、つるつるとすべって、海へおち

た。

無名突撃隊の部屋にも、いちはやく警報がつたわった。

おどろいたのは、隊員だった。

「冰山と衝突した。全員、甲板へ！」

冰山というのさえ、思いがけないのに、その冰山と衝突して、船は沈みかかっているのであった。

隊員たちは、さつきすこし寒くなったから、汽船は、ニューフアウンドランド沖を、加^{カナダ}奈陀の方へ北航しかかったのだらうぐらいに思っていたのであった。

「なんだ、もうベーリング海峡へ来ていたのか」

ベーリング海峡ではない。それと反対の方向の南極のそば近く

へ来ていたのである。

無名突撃隊をひきいるカールトン中尉は、衝突のときに、はげしく頭部を鉄扉てつぴにぶつつけて、重傷を負っていた。だが、彼はさすがに軍人であった。すぐさまカーテンをさいて、たくましい鉢巻をすると、隊員たちに向って叫んだ。

「皆、おちつくんだ。ここは南極に程近いが、やがてリント少将が、救援隊をよこしてくれるだろう」

「えっ、南極？」

「そうだ、もういつても遅いが南極こそ、われわれ無名突撃隊の目的地だったんだ。われわれは、リント少将の指導下に入って、はじめて、行動の命令をうけるはずであったのだ。それから、わ

れわれは……」

「おい、ボートはこっちだ。無名突撃隊！ 早く、こっちへ来い！」

中尉の言葉は途中で切られた。

隊員は、傾いた甲板をすべりながら、われがちに、ボートの方へ走っていった。

「おちつけ！ そのうちに、救助隊が、きつとやってくるぞ！」
吹雪の中に、中尉の声は、ともすれば、うち消された。

そのうちに、不幸な事がおこった。

それは、とつぜん、船内から爆発が起つたことであつた。ボイラーの中に冷い海水がとびこんだため、爆発が起つたらしい。

船は、どーんと、はげしくゆれながら、そのたびに傾斜度けいしやどが加わった。

ピート一等兵は、パイ軍曹とともに、最後に部屋をでた。彼等二人は、一度部屋を出かけたが、外は吹雪と知って、直ちに引きかえして、防寒服ぼうかんふくを出しにかかったのであった。日頃の訓練が、この非常時に、役に立ったのであった。

「パイ軍曹どの。なかなか壮観でありますな」

「なにイ、おい、お前は、くそおちつきに、おちついているじゃないか。われわれは、ここで死ぬかもしれないんだぞ」

「一度死ねば、二度と死にませんよ。ゆるゆるとこの千載せんざい一いちぐ遇うの壮観を見物しておくのですな」

「ふん、お前と話をしていると、わしは、コーヒーでもわかしてのみたくなるよ」

そういうパイ軍曹も、あわてている方ではなかった。

沈没迫る
ちんぼつ

アーク号の甲板は、刻々に傾斜を増していく。もうこの船は、あと五分と、もたないで、海面下に姿を没してしまうであろうと思われた。そのうえ、意地わるく、大吹雪は、いよいよ猛烈にふ

きつのもつて、甲板を、右往左往する人々の呼吸を止めんばかり――。

「おい、ボートはもう一ぱいだ。おれたちは、はいれやしない。ど、どうなるんだらうか」

「うん、仕方がない。艦ともの方へいつて、さがしてみろ。わりこめる席があるかもしれない」

「だめだだめだ。舳へさきの方をさがせ。艦の方はボートごと、ひつくりかえつて、たいへんなさわぎだ」

人々は、なんとかして、ボートの中に、空あいた場所をみつけて、一命を助かりたいものだど、まるで喧嘩けんかのようなさわぎであった。

パイ軍曹は、唇のうえに鉛筆で引いたようなほそい口髭くちひげをひ

ねりながら、大兵のピート一等兵を見上げ、

「おい、ピート。ボートはもう駄目らしい。お前は、あの冷い南氷洋で競泳する覚悟ができているかね」

「わしは、競泳には、自信がねえです。誰よりも一等あとで、海水につかることに、はらをきめました」

「一等あとで海水につかるって、一体どうするんだ」

「いや、なに、一等背の高いほぼしら櫓うしらのうえへ、のぼっちゃうてえわけ
でさ」

「ばかをいえ。それだから、お前のような陸兵は、役に立たねえ
というんだ。陸はに生はえている林檎りんごの樹とはちがうぞ。船がどんど
ん傾いっこういてしまうのだから、一等背の高い櫓うしらてえのが、一向いっこう当て

にならないのさ」

「そうですかい。なるほど、甲板が、いやにお滑り台すべにおあつらえ向きになってきましたねえ。ところで、軍曹どの。あなたは、これから一体どうなさるおつもりなんで……」

「今に、リント少将の飛行船かなんかがこの上へとんで来て、エレベーターかなんかを、この甲板におろすだろうと思うんだ。そいつをこうして、待っていようてえわけだ」

「あつはつはつはつ。軍曹どの。ここは、寄席よせの舞台のうえじやあ、ありませんよ」

二人の勇士は、死を覚悟していると見え、とんでもないばかばかり口を、ききあっていた。

そのときであった。

二人の立っているところから、そう遠くない後方で、とつぜん、どどーンと小爆発がおこって、船の構造物が、がらがらと、はげしい音をたてて崩れた。

「ほう、なかなか景気をそえているじゃないか」

と、パイ軍曹が、へらず口を叩けば、

「わしは、子供のときから、賑にぎやかな方が好きです。讚美歌なんかに送られて天国へいくなんて、わしの性しょうぶん分ぶんにあわねえ。もつと、どかんどかんと、爆発すると、ようがすなあ」

と、ピート一等兵はやりかえして、太い指で、鼻を下から、こすりあげる。

二人は、そのまま放ほうつておけば、いつまでも地獄の門をくぐる
ときまで、その調子で、へらはず口を叩き合っていたことだろう。

——が、幸か不幸か、そこへ邪魔じやまものがとびこんできた。頭を割
られて、顔半面まっ赤に血を染めた将校が、二人の前へよろめき
ながら現れたのであった。二人は、その将校の顔を見るより早く、
声を合せて、叫んだ。

「あつ、隊長だ！」

「あ、カールトン中尉どのだ」

二人は、その傍そばへとんでいった。

中尉の遺言ゆいごん

「隊長どの、しつかり！」

「カールトン中尉！ 傷は、かすり傷ですよ！」

二人は、一生けんめい、重傷の隊長を、元気づけた。

中尉は、間もなく気がついたものらしく、眼をかつと開いた。

「おお、パイに、ピートか。おれは……おれは、もう……」

「おれはもう——おれはもう帰還されますか？」

「こら、ピート一等兵、だまれ。隊長どの、これから遺産のこ
とについて述べられるのだ。しずかにしろ」

「こら、二人とも。お前たちは、こここの場にのぞんで、恐怖のあまり、気がちがったな」

パイとピートは、顔を見あわせて、うなずいた。もう何も喋るしゃべまいぞという信号だった。この期ごにのぞんで、これ以上、隊長に気をつかわせることは、よくないと気がついたからである。

中尉は、二人に脇の下を抱かかえられながら、はあはあと、苦しもうな息をした。しかし、さすがは軍人であった。その苦しい息の下からも、二人を相手にすることは忘れなかった。

「おい、両人。おれを抱えて、三番船せんそうへつれていけ。そ、そして、おれのズボンの、左のポケットに、は、はいつている鍵で……その鍵で、扉をあけるんだ」

パイ軍曹とピート一等兵は、また顔をみあわせて、うなずいた。

「こら、両人とも、そこにいないのか」

二人は、おどろいた。

「はい、いるであります」

「ちやんと、いるであります」

中尉は、眼をとじたまま、うちうなずき、

「そ、そんなら、よし！　そこで、三番船艙の中にはいつて……

はいつて、その、そこにある戦車の中に、おれを乗せてくれ。お

お、お前たちも乗れ」

「えつ、三番船艙に、戦車があるんですか」

「そうだ。お、お前たちの、お眼にかかったことのない恰かつこう好を

した新型の、せ、戦車だ。さあ、は、早く、わしをつれていけ」

「隊長どのは、その戦車に乗られて、どうなさるのでありますか」

「わ、わが輩^{はい}は、せ、折角^{せっかく}ここまで持ってきた戦車に、生前、

一度は、の、乗ってみたいのだ。そ、その地底戦車というやつに

……」

「地底戦車？」

「そ、そうだ。地底戦車だ。リント少将は、そ、その地底戦車をつかって、南極の地底をさぐる——さぐる計画を、たてられてい
るのだ。は、早くしろ。船が、もう、沈む」

「は、はい！」

パイ軍曹と、ピート一等兵とは、顔を見合せた。二人の顔は、

今までのいずれの場合よりも真剣になっていた。死を覚悟して、死の前に、他の何物への執着もすて去った二人であつたが、いまこうして、中尉の紫色になつた唇の間から、無名突撃隊の秘密についてのべられてみると、彼等二人は、本来の任務に奮ふるい立たないでは、いられなくなつた。

「おい、ピート、急ぎ、進め！」

「合がつてん点です。お一チ、二イ」

「三ン、四イ」

二人は、中尉を両方から抱きあげつつ、もはや歩行するのも容易でない傾斜甲板のうえを、器用にとんとんと走つて、階段口から、下におりていった。

幸いなことに、三番船艙は、まだ浸水をまぬかれていた。

扉を、鍵であけた。

扉は開いた。大きな布カバーを取り去ると、下から現れたのは、怪奇な恰好をした重戦車！

地底戦車というのは、これか？

とびら
扉

「おい、ピート、早くしろ」

「えっ」

「ほら、お前の足もとを見る。下から、海水がぶくぶく湧わいてきたじゃないか」

「あつ、もういけませんなあ」

「おい、戦車の扉を開け」

「待つてください。すぐあけます」

「おい、早くしないと、隊長どの、折角の希望が水の泡になる」

「えっ、もう泡をふきだしたのか」

「ちがうちがう。早く、戦車をあけろ」

「やあ、もう大丈夫。さあ、あきますぞ！」

うーんと、大力のピート一等兵が、両腕に力をこめてハンドル

をねじると、戦車の扉は、ついにぐーと、大きく開いた。

「あきました、あきました、軍曹どの」

「ばか。もう間にあわないや」

「えっ。どうしました」

「中尉どのは、昇天された。〃生前に、一度でいいから、折角ここまで持ってきた地底戦車に乗ってみたい」といわれたのに、お前が戦車の扉をあけるのに手間どっているもんだから、ほら、もうこのとおり、天使になってしまわれた。ああ、さぞかし無念でしょう。中尉どのは、これ一重ひとえに、平生へいぜいピート一等兵が、訓練に精神をうちこまなかつたせいです」

「ねえ、軍曹どの。こうなりや、気は心でさあ。中尉どのは、息

を引取られたかは知らないけれど、一度、この戦車の中へ入れて、座席につかせてあげては、どうでしょう」

「この野郎。中尉どのに、申しわけないと気にして、いやに中尉どのにサービスするじゃないか」

「軍曹どの、早く。ぐずぐずしていると、戦車の中に、海水が入ります。中の器械が、濡ぬれてしまいますぜ」

ピート一等兵が注意を発したので、パイ軍曹は、ぎくりとした。

「おい、早くしろ。浸水させちや駄目だ。お前から、先へ入れ」

軍曹は、ピートの尻をうしろから、どんとつきあげた。ピートは、ばね仕掛じかけの人形のように戦車の中に飛びのつたが、そのときまたどどーん、どどーんと、相ついで小爆発が起つて、船体がぐ

らぐらと、動揺した。

「あつ、軍曹どの。早く、こつちへ入つて、戦車の扉をしめてください。いよいよ、これは浸水、まぬがれ難がたしです」

「そうか。あつ、ほんとだ。それ、そこから海水が流れこんでいたじゃないか、靴をぬいで、どんどんかいだせ」

「軍曹どの、扉を！」

「おお、そうだ。扉を閉めるぞ！」

パイ軍曹は、力一杯、戦車の扉をばたんと閉じた。

とたんに、戦車内には、電灯が、ぱつと点ついた。自動式の点灯器がついていたのである。二人は、うれしそうに、あたりを見廻みまわしていたが、そのうちに二人の視線が、ぱつと合った。そのとき

二人は、べつべつに、同じことを思い出した。

「おい、ピート一等兵。カールトン中尉どのの姿が、見えないじやないか」

「そうです、軍曹どの。いま、私が申上げようと思つたところです。あなたは、なぜ、中尉を外に置いたまま、その扉をお閉めになつたんですか」

「ふーん、失敗しまつた。おれが悪いというよりも、貴様きさまが、たいへんな声を出して、扉を閉めろ閉めろと、さわぎたてるもんだから、とうとうこんなことになつたんだ」

「あつ、そうでありましたか。じゃあ、わしがすぐいつて、お連れしてまいりますよう」

ピート一等兵は、奥からのこのこと出てきて、戦車の扉のハンドルをまわそうとしたから、パイ軍曹はおどろいて、ピートの手に噛かみついた。

落下速度

「ああ痛い。軍曹どのに申上げます。軍曹どの、狂犬病に罹かかられました」

と、ピート一等兵は大粒の涙をはらいおとしながら、叫んだ。

「なにを、このばかり！ この扉をあけて、どうしようというのか。この扉をあければ、たちまち海水が、どつと流れこんでくるじゃないか」

「えっ、そんなことはありません。どつと、流れこんでくるなんて、そんな……」

「さつきとはちがうぞ。あれからかなり時刻がたっている。おいピート。この戦車は、もう海面下に沈んでしまった頃だぞ」

パイ軍曹は、そう叫んで、自分でも、真まっさお青な顔になった。

「ええっ、本当ですか、軍曹どの。この戦車は、ついに、海面下に没しましたか」

「大丈夫、それに違いない」

「それじゃ、わしたちは、もう海の上を見ることかできなくなつたんですか」

「もう、よせ。貴様がくだらんことをいうから、くだらんことを思い出す」

「いや、くだらんことではないです。わしは、この戦車が、われわれの棺かん桶おけであることを、どうかして、早く信じ、なお且かつ、ついでに、この棺桶を一步外へ出た附近の地理を、なるべく、頭の中に入れておこうと思つて、懸命に努力しているところです」

「もういい。戦車の外のことなんて、もうどうでもいい」

「じゃあ、この棺桶は、じつにすばらしいですなあ。オール鋼鉄製の棺桶ですぞ。棺桶てえやつは、たいていお一人さん用に出来

ていますが、軍曹どの、われわれのこの棺桶は、ぜいたくにも、お二人さん用に出来上つていますぜ」

「おい、しばらく、黙つとれ。おれは、なにがなにやら、わけがわからなくなつた」

パイ軍曹は、座席のうえに、うつ伏して、両腕で、自分の頭を抱えてしまった。

それを見て、ピート一等兵も、なにやら、心細くなつて、自然に口に蓋ふたをした。

ざあざあと、気味のわるい音が、この戦車の壁の外です。ごーん、ごーんと、鉄板を叩くような音も、聞える。

と、とつぜん、どどどーんと、四連発の大砲を、あわてて撃

ちだしたときのように、おそろしい響きが伝わってきた。——と、思ったとき、そのとき遅く、二人の乗っていた戦車は、ぐらぐらとうごきだした。

「おい、たいへんだ」

「足が、ひとりでに、上へ向いていくぞ」

戦車はまるでフットボールを山の上から落したときのように、天井と床とが、互いちがいに下になり上になりして、弾はずみながら、落下していくのが、二人にも、やっとわかった。

（どうなるのであろう？ これも、カールトン中尉の遺骸いがいを、外に置き忘れてきたためか！）

二人は、もう、生きた心もなかった。

静かな海

はげしいいきおいで、何千メートルという深い海底へおちていく地底戦車の中で、パイ軍曹とピート一等兵とは車内を、ころげまわったり、ぶつかったりして、たいへんな目にあつた。床だと思つていると、それが、ぐらつとうごくつと、天井になつたり、そうかと思うと、天井が、横たおしになつて、かべになつたり、二人は身のおきどころもなかつた。いや、身のおきどころがないな

どという生なまやさしいことではなく、からだとからだ、いやとい
うほどぶつかり、そうかと思うと、鉄壁に、がーんと叩きつけら
れ、戦車が海底にやつと達したときには、とうとう二人とも気を
うしなつてしまった。

だが、この地底戦車は、よほどしつかりできているものと見え、
万事異常はなく、車内の電灯も、ちゃんと点ついていて、エンジン
のうえに、長くなって倒たおれているパイ軍曹とピート一等兵の二人
を、気の毒そうに照らしていた。

ここで、二人が、そのまま息をひきとつてしまえば、もう『地
底戦車の怪人』も、ここでおしまいになるはずである。これから
後が、なかなか長くて面白い冒険談となるのである。だから、読

者諸君は、パイ軍曹とピート一等兵とがたいへん好都合にも、間もなく息をふきかえしたことに気がつかれるだろう。

これは、二人にとって、どれくらい後のことだったか、さっぱり分らない。どっちが、先に気がついたのか、それも、はっきりしないが、とにかく二人は、

「うーむ」

「あ、いたッ」

と、別々に呻うなりながら、手足を、そろそろとうごかしはじめた。だが、四肢ししはくたくたになり、首の骨はぐらぐらになつて、いで、気の方は一足おさきに、相当しゃんとしながら、からだはいうことをきかないのであつた。

「うーん、あ、たたたたッ」

「とめ、とめ、とめ、とめてくれたか」

と、うわごとのようなことを、二人は、とめどもなく喋りちらす。二人が、傾斜した車内に、半身を起してあぐらをかくまでには、十七、八分もかかった。

「おい、ピート一等兵、だらしがないぞ」

パイ軍曹は、自分のことは棚たなにあげて、兵を叱りつけた。

「はい、軍曹どのが、あれから今まで、一度も号令をかけてくださらないものでありますから自分もつい休めをしていたのであります」

「なにをいうか。頭に大きな瘤こぶをこしらえて休めもないじゃない

か」

「いや、これも、軍曹にならったわけではありますが、さすがに上官の瘤は、自分の瘤よりも、一まわりずつ大きいのでありますな」

「ばかをいえ」

こう、へらず口が、どんどん出るようでは軍曹も一等兵も、瘤こそ作つたが、まず元気はもとにもどつたものと思われる。

「おい、ピート、水が飲みたいが、水を持ってこい」

「はい、どこから、持ってきますか」

「……」

軍曹は、へんじをするすべを知らなかった。ここは、どうやら深い海底のように思われる。扉をあければ、ふんだんに水はあり

ながら、その水は飲めないときている。全く、いじのわるいものである。いや、そんなことよりも、海底におちながら、外部から、海水も侵入せず、空気もくさくならないのが、なにより天の助けと、ありがたく思わなければならぬ。考えていくと、こうして、二人とも助かっていることが、だんだんふしぎで、そしておそろしくなってくるのだった。

「パイ軍曹どの。一体自分は、ただいま只今、生きていますか、それとも死んでしまったのでありませんようか」

「なにッ。死んだ奴が、やつそんなに上手に口がきけるか。また、おれの声が、きこえたりするものか。ばかなことも、やすみやすみいえ」

と、叱つたものの、軍曹は、ピート一等兵が、とつぜんへんなことをいいだしたので、気味が変わるくて仕方がなかった。

「はあ、やっぱり、只今は生きていますか。なるほど」
「只今も、なるほどもないよ。ちと、しっかりしなきゃいけない。びつくりするのも、無理ではないけれど……」

「いや、軍曹どの。自分は、たしかに一度死んだんです。それから再度、生きかえたのです、たしかに、或る期間、死んでいました」

「そんな、へんなことをいうものじゃないよ。死んだ奴が、どうして生きかえるものか」

「いや、そうではありません。軍曹どの。なぜ、そんなことをい

うかと申しますと、さつき自分は死んでいる間に、幽霊を見かけました。幽霊が見えたんです。そのへんを、すーっと歩いていきましたよ」

幽霊ゆうれい

「おどかすなよ」

と、パイ軍曹は、鉛筆ですじをつけたような細いくちひげ口髭をうごかして、いった。

「いえ。ほんとです。軍曹どのは、全くちがった服装をしていました。幽霊の足音が、ことんことん床を鳴らしたのを、聞いたようですよ」

「ふーん」

パイ軍曹の顔が、なぜか、さつとかわった。そしてピート一等兵を、じつと睨み据にらえていたが、やがて口をひらき、

「その幽霊なら、さつき、わしも、ちよつと見たよ」

と、こんどは軍曹が、へんなことをいいだした。

「はあ、軍曹どのも、見たでありますか。じゃあ、夢じゃなくて、本物の幽霊が、この戦車の中に現れたんですね。ううツ」

と、大男のピート一等兵は、肩をすぼめた。戦車の中に、幽霊

が現れるなんて、途方もない話だ。相当、戦場ではたらいてきた戦車なら、そのとき戦死した勇士の幽霊が、出てくるかもしれない。だが、これは新しく出来たばかりの戦車なのである。戦争に出たことは、一度もない。その戦車に、幽霊が出てくるなんて、へんなことだ。

「あははは」

と、パイ軍曹が、とつぜん笑い出した。

「軍曹どの、なにが、おかしいのですか」

「あははは」

軍曹の声は、戦車の壁に反射して、妙に、ううーんと後をひいた。ピート一等兵は、肩のうえに、手をかけながら眼を丸くした。

「おい、ピート一等兵。幽霊が出るなんて、嘘うそだよ」

「はあ、嘘ですか」

「つまり、これは生理的の現象だ。いいかね。おれたち二人は、さつきから、同じように頭をがんがんとうったじやないか。だから、同じように、頭がへんになつて、同じように幽霊みたいなものの姿が、見えたというわけだよ」

「ははン、同じように頭がへんになつて、同じような幽霊の姿が、頭の中にうかび出たというわけですか。なるほど、そうかもしれませんが。軍曹どのと自分とは、前から、双生児のように、なんでも気が合うのですから、そういう場合に、二人の頭の中に、別々に出てくる幽霊が同じ姿をしていても、かくべつふしぎでな

いわけですなあ。なるほど、ああなるほど」

「お前のように、臆病おくびようで、びくびくしていると、西瓜すいかが、機

雷に見えたりするのだ。しつかりしろ。あははは」

パイ軍曹は、笑った。だが、その笑いごえは、あまり朗ほがらかであるというわけにはいかず、どっちかというのと、とってつけたような笑いごえだった。

それでも、ピート一等兵は、やつと、おちついたようであった。「なあに、自分は、たいていの物にはおどろきませんが、幽霊ばかりは、にが手なんですよ。あのひきずるような足音、そして地の底から呼んでいるようなあのうつろなこえ、あいつは、まっぴら御免ごめんですよ」

そういいながら、彼はポケットをさぐって、煙草たばこをさがした。

だが、煙草は、なかった。

「あれ、煙草がない。しまった、船へ、おいてきた。軍曹どのは、お持ちですか」

「なんだい、煙草か。うん、煙草なら、ここにあるが、まさか、この戦車の中じゃ、油があるから、危くてすえないよ」

「ははあ、なるほど」

と、ピートは、うらめしそうだ。

「あつ、たいへんだ。軍曹どの」

「なんだ、おどかすない」

「たいへんですよ、これは。煙草のないのはいいが、一体これか

らのわれわれの食事はどうなるんでしょうか」

「うん、そのことには、よわっているんだ。しかし、一体われわれは、いつまで生きていくかということの方が、先の問題だよ。

まあ、どうせ、無い命なんだから、それまでは、朗かにやろうぜ」

「朗かにやれといっても、食うものがなくちや、朗かにやれませんぜ」

「ぜいたくいな。とにかく、この戦車は、深い深い海底へおちこんでいるんだから、救援隊は来っこなしさ。ただ、こうして死をまつばかりだよ」

「いやだなあ。どうせ、乗るんだったら、戦車よりも、破れボートの方がよかった」

「なぜ？」

「だって、ボートにのつてりや、あおむ仰向けば、天から降ってくる雪を、口の中にいれることができるし、たまにや、近くの流水の上に白熊がのつているかもしれませんから、銃をぶつぱなして、白熊の肉にありつけるかもしれない」

「やめろ、そんなうまそうな話は！ よけいに腹が減って、よだれが出るばかりだ」

と、パイ軍曹は、腹を立てた。

りんご
林檎

傾いた戦車の中に、電灯だけは、ぜいたくにも煌々こうこうと照つている。

ピート一等兵は、大きなずうたい凶体を、小さく縮めながら、失心したようになって、床を見つめている。

（ああ、なんとかして、もう一度、パンというものをむしやむしや食べてみたい。娑婆しゃばには、むかしビフテキなんてえ、うまいものがあつたなあ）

そんなことを考えているうちに、ピート一等兵は、おやという表情で、鼻をひくひくさせた。

(おや、なんか食べ物にの匂においがする！)

彼は、くすくすくと、鼻をならした。

すると、とつぜん、まるで、お伽ときばなし噺はなしのようなことが起つた。

それは、傾いた戦車の鉄板の床の上を、林檎りんごのような形をしたものが、ころころと、ピート一等兵の足あしもと許へ、ころげてきたのであつた。

彼は、太い指で、いくども、眼をこすつた。

(あれえ、おれの眼は、どうかしているぞ。あまり食べ物にのことを考えつづけたため、とうとうおれの頭はへんになって、有りもしない林檎が目の前に見えるのじゃないか)

眼を、ぱちぱちしてみたが、たしかに彼の足許には、林檎がお

ちている。

彼は、いくたびか手をのぼそうと思いつつ、いやいや手をだすまいと、はやる心をおさえた。なぜなら、手を林檎の方へのぼしたが最後、せつかくの林檎が、しやぼん玉に手をつけたように、つと、消えてしまうのではなからうか。まぼろし幻にしても、林檎の形が見えている間はたのしい。幻が消えてしまえば、どんなに、つまらないだろう。それを考えると、ピート一等兵は、手をのぼすこともならず、からだを化石のようにして、足許へ転がってきたその怪しい林檎の形を、見まもった。

だが、その林檎の色は、あまりにうつくしかつた。まつ赤なつやつやした色が、食欲をそそりたてずには、おこなかつた。そし

て、あの甘ずっぱい林檎の匂いまでが、つーんと彼の鼻をつきさしたように思ったのである。

ついに、ピート一等兵は、幻の林檎の誘惑に敗けてしまった。彼はぶるぶるふるえながら、手をのぼした。そして、思いきつて、林檎をつかんだ。

「おやッ」

大きなおどろきのこえが、彼の口をついてとびだした。

「あつ、ほんとの林檎だ！」

彼は、その場に、おどりあがった。林檎を頭の上に押しただきながら……。そして、ひよつとしたら、自分は、とうとう気がへんになってしまったのかもしれないと、考えながら……。

「おい、どうした、ピート一等兵。しっかりしろ。気をしずめな
くちや……」

パイ軍曹はだしぬけにピートが、さわぎだしたもので、これま
た、心臓が破裂したようなおどろき方だった。

「軍曹どの。奇蹟きせきです。大奇蹟です」

「なんじゃ、奇蹟とは」

「あり得ないことが起ったのです。ほら、この林檎です。自分の
足許へ、ころころと転がってきました。この林檎がですよ」

「あつ。林檎だ！ こつちへ、よこせ」

「だめです。自分が見つけたんです」

「ちよつと一寸見せろ。この林檎は、どこにあつたのか」

「軍曹どの、半分ずつ食べることにしましょう。自分にも、残してください」

「食べるのは後まわしだ。おいピート、この林檎は、喰くいかけだぞ。お前、早い所、やったな」

「いいえ、うそです。自分は、まだ一口も、やりません」

「それは、ほんとか。ほら見る。こここのところに齒型がついている。お前が、かじらなければ、誰が、こここのところを、かじったんだ」

「さあ？ とにかく、まだ自分は、決してかじりません」

「じゃあ、いよいよこれはへんだぞ。お前がかじらず、おれがかじらないとすれば、この生なまなま々しい林檎のうえについている齒型

は、一体、だれがつけたんだろう？」

二人は、ぞーつとして、互いに顔を見合せた。そして、どつちからともなく、かすかにうなずいた。次の瞬間に、二人は、ひしと寄り合つて互いに抱きついていた。

「わ、幽霊が、あの林檎をかじつたんだ」

「ああ、幽霊の歯型！ やっぱり、この戦車の中にや、ゆ、幽霊がいるんだ！」

歯型のついた怪しい林檎は、二人の勇士を、ふるえあがらせた。一体、どうしたわけだろう？

林檎の幽霊

ほんとに、幽霊が、この地底戦車の中に、巣くっているのだろうか。

鼻の下に、鉛筆ですじをひいたようなひげを生やしているパイ軍曹は、こんな新しい戦車の中に、幽霊などがでてたまるものかと、さつき大男のピート一等兵を叱りつけたのであるが、今や、彼の自信は、嵐にあった帆船のように、ひどくかたむきだした。

「おい、ピート一等兵」

「へーい」

二人は、抱き合つたまま、小さい声で、話をはじめた。

「お前、これから、戦車の隅から隅までさがして、幽霊がいなかどうか、たしかめてみる」

「そ、そんな役まわりは、ごめんです」

「なに、お前は、上官の命令に背くのか^{そむ}」

「いえ、そんな精神は、ないであります。ですが、軍曹どの。自分分は、生きている敵兵は、たとえ百万人が押しかけてこようと、尻ごみはしないのですが、死んでいる幽霊は、たとえ一人でも、どうも虫がすきませんであります」

「お前は、あきれた臆病者だ。そんな弱虫とは知らず、おれはこれまで、お前にずいぶん眼をかけてやった。アイスクリームが、

一人に一個ずつしか配給されなときでも、おれはひそかに、お前には二つ食べさせてやったのだ。あああ損をした」

パイ軍曹は、とんだところで、ピート一等兵をこきおろしたが「アイスクリーム」といったとき、彼は、もうこの戦車の中ではどんなことをしたって手に入れることのできないアイスクリームであることを考えて、しらずしらずに大きな吐息といきが出た。

ピート一等兵は、軍曹から、とめどもなく叱られながら、足許にころがつている林檎を、じろじろと、横目なまでながめて、生つばをのみこんでいた。

パイ軍曹は、むずかしいかおをして、広くもない戦車の中を、じろじろとみまわした。幽霊が、かくれているとすれば、どこに

いるのだろうか。それとも、幽霊というやつは、ふだんは、人間の目には見えないのかもしれないから、案外、自分の目の前に立っているのかもしれない。じつと耳をすましていたら、幽霊の吐息がきこえるのではないか、などと、いろいろと気をくばって、幽霊の発見に努力をしたのであった。

だが、幽霊のいるらしい気配は、一向いっこうにしなかつた。

（どうも、へんだ。おれは、どう考えても、こんな新しい戦車の中に、幽霊がすんでいるとは思わない）

パイ軍曹は、そのとき、こんなことを思った。

（さつき、ピートと二人で、この戦車の中へ、とびこむとき、船員か戦友かが、ちようど食べかけていた林檎を、二人のどつちか

が、靴のさきでけとぼして、この戦車の中へ、けこんだのではあるまいか。すると、あの林檎には、菌型のほかに、靴でけとぼしたあとが、ついているかもしれない。もう一度、あの林檎をとりあげて、よくしらべてみよう！」

林檎と幽霊の關係に、パイ軍曹の悩みは、ひとかたではなかつた。

パイ軍曹は、きよろきよると、あたりを、みまわした。

「はて、林檎は、どこへおいたかな」

林檎が、見あたらない。

「おい、ピート一等兵。さっき的林檎を、もう一度、しらべたい。林檎は、どこにある」

「さあ、どこへいきましたかしら……」

ピートは、ふしぎそうにいった。

「おい、ピート。そっちへ、離れてみよ。猿の子供みたいにい
つまでも、おれに抱きついていても仕方がないじゃないか。お前
が、あの林檎を、尻の下に、しいているのではないか。早く、の
け！」

「はい、今、のきます」

ピート一等兵は、立ち上った。

二人は林檎をさがした。

ところが、林檎は、どこにもなかった。軍曹は、ピート一等兵
のポケットの中までさがしたが、林檎はなかった。もちろん、自

分のポケットにもなかった。

「どうも、へんだな。今、そのへんにあつた林檎が、どうして、なくなつたんだらう。これは、いよいよふしぎだ」

パイ軍曹の顔が、また一だんと、青くなつた。

すると、ピート一等兵が、手で自分の口にふたをしながら、

「あつ、わかりました。軍曹どの、林檎が見えなくなつたわけが、わかりました」

「お前に、わかつた？ どういうわけか」

「つまり、あの林檎も、幽霊だつたんです。林檎の幽霊だから、とつぜん、林檎の姿が、かきけすように、見えなくなつてしまつたというわけです」

「なるほど、林檎の幽霊か、そういうことが、あるかもしれないなあ。ああ気持がわるい！」

「ああ軍曹どの。林檎の幽霊！ ああ、おそろしいですなあ」といいながら、ピート一等兵は、胃袋の中からこみあげてくるげっぷを、手でおさえた。林檎くさいそのげっぷを……。

早業はやわざ

パイ軍曹が、林檎と幽霊の関係について、おもいわずらつてい

る間に。ピート一等兵は、早いところ、その林檎をしっけいして、皮もたねも、みんな自分の胃袋へおくりこんでしまったのだった。すばらしい味だった。彼は、生れてこの方、こんなうまいものを、たべたことがないと思った。胃袋が、いつまでも、生き物のように、うごめいているのが、はつきりわかった。

おかげで、ピート一等兵は、たいへん元気づいた。もう、幽霊もなんにも、なかった。

ピート一等兵の元気にひきかえ、パイ軍曹の方は、とつぜん姿を消した林檎の幽霊のことで二重の恐ろしさを、ひしひしと感じ、ますます青くなつて、ちぢかんだ。南極の凍りついた海底ふかくおちこんだうえに、人間の幽霊のほかに、林檎の幽霊にまで、く

るしめられるとは、なんという情けないことだろう。軍曹は、しやがんだまま、頭を抱えて、考えこんだ。

それを見ると、ピート一等兵は、ちよつと気の毒やら、おかしいやらであつた。だが、笑うわけにも、いかなかつた。

そこで、彼は、軍曹にこえをかけた。

「軍曹どの、このままで、じつとしては、われわれは、死ぬよりほかありません。ですから、思い切つて、この地底戦車をうごかして、ニューヨークまで、かえつては、どうでありますか」

パイ軍曹は、顔をあげた。そして、あきれがおで、

「ばか。ニューヨークまで、こんな地底戦車にのつてかえられるものか」

「しかし、軍曹どの。われわれ軍人は、常にそれくらいの元氣は、もっていなければならぬと思うのであります」

「それは、わかつとる。しかし、ニューヨークまでかえるには、何ヶ月かかるかわからない。その間重油をどうするんだ。また、われわれは、なにを食べて、その何ヶ月かを生きていればいいんだ」

パイ軍曹は、こうなると、ますますひかんしていった。

「なアに、軍曹どの、なにか考えれば、どうにかありますよ」

と、ピート一等兵は、ますます元氣なこえでいった。くいかけの林檎一個が、たいへんな力を、彼にあたえたのだ。

「どうかなると、口でいうだけでは、どうもならん」

「だめです。軍曹どのは、やってみないうちから、もういけないとおもってられるから、だめなんです。どうせ、死ぬときは死ぬのですから、じっとして死ぬよりも、軍人らしく、この地底戦車で突進しながら、たおれた方が、軍人らしい最期さいごではありませんか」

「なるほど、なあ」

パイ軍曹は、大きくうなずきながら、立ち上った。

「お前みたいな臆病者に、こつちが、はげまされようとは考えなかつた。お前は、ほんとは、臆病者じゃなかつたのかなあ」

パイ軍曹は、感心していった。そして、さつと、しせいを正しくすると、

「集まれ！」

と、号令をかけた。

ピート一等兵は、とつぜん、集まれをかけられて、びっくりしたが、すぐさま、かけ足をして、パイ軍曹の前に、不動のしせいをとった。

「番号！」

パイ軍曹は、大まじ目でいった。

「一チ！」

ピート一等兵は、きまりがわるくなった。ニイ三ンとひとりでもつとさきをいいたいくらいであった。

「異状ないか」

「はい、全員異状、ありません」

全員といつても、たった一人である。隊長をあわせても、たった二人だ。

「命令。地底戦車兵第……ええと、第百一連隊第二大隊第三中隊第四小隊のパイ分隊は、只今より出動する」

と、べら棒ぼうに大きな数をいって、

「戦車長は、パイ軍曹。操縦員は、ピート一等兵。第一番砲手はピート一等兵。第二番砲手はパイ軍曹。通信兵はパイ軍曹。機関員はパイ軍曹……」

どこまでいっても、要するに、たった二人であつた。たいへん手が足りないが、どうも仕方がない。

「全員部署につけ！」

そこでパイ軍曹は、一番高い戦車長席につき、ピート一等兵は、前の方の、操縦席についた。

「部署につきました」

「よし。では、出動！ 針路^{しんろ}、真南！ 傾斜をなおしつつ、前進」

地中前進

ピート一等兵が、エンジンをかけた。車内は、たちまち、轟^{ごうごう}

々たる音響にとざされた。レバーをたおすと、地底戦車は、ぶんとんごとんと、前進をはじめたのであった。

パイ軍曹は、配電盤を睨にらんだり、戦車のゆく方を考えたり、なかなかいそがしかった。

「おい、ピート。エンジンの調子は、わるくないようだな」
軍曹は、送話器をひきよせて、いった。ピート一等兵の耳にくりつけた高音受話器が、軍曹のこえのとおりには鳴った。

「エンジンの調子は、異状ありません」

ピート一等兵は、なかなか操縦上手じょうずだった。戦車は、はじめ、ひどく傾いていたが、まもなく、ちゃんと水平になおって、気持ちがよくなった。

ギーン、ぴし、ぴし、ぴしッ。

地底戦車の前にとりつけてある硬い廻転螺旋刃らせんじんが、きりきりとまわり、土か氷か岩石かはしらぬが、どんどんくだいて、戦車を前進させているようであつた。

距離積算計というメーターが、だんだんと大きな数字を、あらわしていった。たしかに前進しているのであつた。

こうやって、気もちよく前進していくと、戦車は地上を走っているように思われるのであつた。たいへん具合がよろしい。

「と停め！」

パイ軍曹が、号令を下した。

ピート一等兵は、あわてて、レバーをひいて、ギアをはずした。

そして、足踏み式の、給油バルブを閉めつけた。地底戦車は、ぎぎーツと、とまった。

「どうしたのでありますか、軍曹どの」

「うん、ちよつと、外をのぞいてみようと思うのだ」

「ああ、そうですか。多分、海底の氷の塊かたまりの中でしょう」

「そうかもしれないなあ」

パイ軍曹は、展望鏡を、戦車の上から出すために、ハンドルをまわした。

ハンドルは、なかなかまわらなかつた。

「硬いものが、おさえつけているらしい」

それでも、展望鏡は、頭だけを少し出しているようであつた。

軍曹は、そこで、車外に、赤外線灯をとぼした。そして、展望鏡でのぞいてみた。赤外線をあてて、展望鏡をちよつとかえると、まっくらなところでも、はつきり見えるのだった。地底戦車には、なくてはならない展望鏡だった。

「おや、これは、土の中だ」

と、パイ軍曹は、叫んだ。展望鏡の中にうつったものは、たしかに、小さい石を交^{まじ}えた水成岩とも土ともつかないあつい層であった。

「えっ。土の中ですか」

「そうだ。われわれは、もうすでに、陸にぶつかっているのだ。これをどんどん進んでいくとうまくいけば、やがて、わが南極派

遣隊の駐屯ちゆうとんしているところへ出られるかもしれないぞ」

「そうですか。そいつはいい。うまくいくと、これは、たすかりますね」

「うん、とにかく、もっと前進をしてみよう、前進！」

パイ軍曹のおにも、生色せいしよくが、よみがえってきた。地底戦車は、ふたたび、轟々と音をたてて、前進をはじめた。

「針路、真南！」

キーン、ぴし、ぴし、ぴしッ。

地底戦車は、ときどき空まわりからをしながら、それでも、だんだん前進していった。

「よし、この分では、相当見込みがあるぞ」

パイ軍曹は、にんまりと笑った。

下をみると、ピート一等兵が、汗ばみながら、しきりにハンド
ルをとっている。電熱器のおかげか、それとも地底深いせいか、
車内は、かなりに温い。そのとき、パイ軍曹の眼は、とつぜん、
あやしいものの姿を、とらえた。

「おや、林檎だ。さっきの林檎が、あんなところに落ちていた」

林檎は、ごろごろと転げながら、軍曹の席に近づいた。軍曹は、
身をおどらせて、下に下りると、その林檎を手にとった。たしか
にほんとの林檎だ。すてきな香りがする。掌てのひらの中に、ひんやりと
した感じがったわる。そのとき、林檎を手にとってみていたパイ
軍曹は、

「おや、これはへんだよ。歯型がない！」

と、小首をかしげた。なぜ、こうして、いくつも、林檎が、ころころ転げだしてくるのだろうか。

林檎の始まり

「ピート一等兵。エンジンをとめろ。そしてこっちへ下りてこい」と、パイ軍曹は、鼻の下に、鉛筆ですじをひいたような細いひげを、ぴくりとうごかして、さげんだ。

「さあ」

大男のピート一等兵は、地底戦車のエンジンをぴたりととめ、よつこらさと、座席から下りてきた。

「軍曹どの。もう、自分に対し、勲章くんしょうでも、下さるのですか」

「ばかをいえ。もし、このままうまく地上にでられることがあつたら、お前を銃殺するよう、上官に申請してやる」

「じよ、冗談を……」

「いや、ほんとだ。貴様は、じつに、けしからん奴だぞ。この地底戦車内において、指揮官たるおれの眼をごま化し、貴重なる食料品を無断で食べてしまうなどということが、許せると思うか」

「はあ、——」

ピート一等兵は、眼を白黒している。さては、パイ軍曹、自分が林檎をしっけいしたことを感づいたな。

「軍曹どの。自分は、幽霊の林檎なんか、たべないであります」
そんなことが知れたら、たいへんである。ほんとに、銃殺されるかもしれない。食い物のうらみというのは、おそろしいから：
…。

「なにイ。まだ白を切っているか。よオし、では、さっきの林檎は、食べないことにしておこう」

パイ軍曹は、眼をぎよろりと光らせ、にやりと笑い、
「気をつけ！」

ピート一等兵は、気をつけをする。

「一步前へ！ 口を大きくひらけ！」

「ええッ」

仕方がない。ピート一等兵は、天井の方をむいて、口を大きくひらいた。

「こら、もつと下を向いて、口をあけろ」

「下へ向けないであります。さつきから首の骨が、どうかanttたのであります。幽霊のことを、あまり心配したせいであろうと思います」

「つべこべ、喋るな。命令どおりすればよいのだ。——もつと下へむけ。それから、号令とともに、大きく、息をはきだせ。さあ、はじめる。おーい」

ピート一等兵は、泣きだしそんな顔をしている。

「はあッ」

と、申しわけみたいに、小さい息をはく。

「こら、そんな息のつき方では、だめだ。まるで、お姫様が吐息をついているようじゃないか。もつと大きく息を、はきだせ。こういう風に。おーイ、はあ!! 二イツ、息をはあ!!」

軍曹は、いじわるい笑いをうかべて、ピート一等兵のよわっている顔をみあげた。

「軍曹どの。もう、たくさんであります。あれは、自分のしらないうちに、林檎が胃袋の中へ、とびこんだのであります」

大男のピート一等兵が、ベそをかいているところは、なかなか

おもしろい。

軍曹は、やっと、思いのとおりについて、気がせいせいした。

「そうか、無断でそういうことをやったことに対しては、いずれあとで処罰する」

と、パイ軍曹は、そり身になって、

「ところで、おれは、もう一つ、こういうものを持っているんだ」と、かくしていた林檎を、ピートの眼の前に、ぬつとだした。

「ヤッ！ まだ、あつたのですか」

ピートは、おどろきのこえをあげた。そして、彼は林檎の方へ、手をのばした。軍曹は、すばやく林檎をひっこめると、その手を、いやというほど殴なぐりとばした。

意外な声

「軍曹どのは、その林檎を、ひとりで、召しあがるつもりなんでしょう」

「そうだ。さっきの林檎は、お前がくってしまった。こんどは、おれに食べる権利があるのだ」

「半分ください」

「いや、やるものか」

そんなことをいつているうちに、パイ軍曹の胃袋が、もう待ちきれなくなつてしまつた。この、どこからでてきたか、わけのわからない幽霊林檎のすじょう素性をしらべることの方が、先にかたづけなければならぬことだつたが、こうして手にもち、いい匂いをかぎ、うつくしい林檎のはだをみていると、そんなことは、もう、後まわしだ。はやくがぶりと喰いつかないでは、いられなくなつた。

パイ軍曹は、目をつぶり、大きな口をひらき、林檎をがぶりとやろうとした。これをみていたピート一等兵も、もう、たまらなくなつた。

「あ、軍曹どの。お待ちなさい」

「なんだ、なぜ、とめる」

「その林檎は、どうも、たいへんあやしいですよ。さつき、自分がたべたとき、へんな味だと思いましたが、ああ、あいた、あいた、あいた、あいたたたたッ」

ピート一等兵は、とつぜん顔をしかめ、自分の腹をおさえて、くるしみだした。

「おい、どうしたピート。しつかりしろ」

「あ、あいた、ああいたい。軍曹どの、その林檎を食べてはいけません。その林檎の中には、毒が入っています。うわーッ、いた
い」

ピート一等兵が、しきりにくるしがるので、パイ軍曹は、心配

になった。

「毒がはいっているって？　ほんとかなあ」

「ほんとです。毒のある林檎であります。軍曹どの、自分はもうさっきの林檎の毒にあたってとても助かりません。ですから、そのついでに、軍曹どののもっておられる林檎も、自分が食べてしまいましよう。そうでないと、自分が死んだのち、軍曹どのがこの林檎を召し上るようなことになる、軍曹どのもまた一命を……」

「だまれ、ピート一等兵。貴様は、林檎がほしいものだから、そんなうそをついているんだな。ふふん、その手には、のるものか。これを見ろ！」

というが早いか、パイ軍曹は、もっていた林檎に、がぶりとかぶりついた。

「あつ、軍曹どの、それはひどい」

ピート一等兵は、パイ軍曹に、とびついた。軍曹は、林檎をとられまいとする。そうして二人は、組みあつたまま、床にどうと転がってしまった。たつた一つの林檎のことで、地底戦車の中に、しばらく格闘がつづいた。まことにあさましいことだったが、二人の空腹は、それほど、もうたえられなくなっていたのだ。

上になり下になり、二人が組みうちをしているうちに、かんじんの林檎が、軍曹の手をはなれて、ころころと床のうえに転がった。

「あつ、しまった」

パイ軍曹は、手をのばして、それをおさえようとする。ピート一等兵は、そうさせまいとする。二人の身体は、からみあつて、林檎のあとを追う。いつしか二人は、戦車の隅っこに、しきりに頭をぶちつけあつていた。

「こら、手を出すな」

「いや、自分も食べたいのです」

二人の争いは、いつおわるとも、わからなく見えたが、そのとき、何者ともしれず、二人の方に向つて、大ごえで、よびかけたものがあつた。

「お二人とも、手をあげてもらいましょう。手をあげなきや、こ

の機関銃の引金を引きますよ」

おもいがけない人間のこえだ。

（あつ、あの幽霊か？）

二人は、とたんに顔の色をうしない、こえのしたうしろをふりかえってみると……。

安全条件

「まあまあ、そんなこわい顔をしないで、おとなしくしてください

い。お二人とも、僕に反抗しなければ、べつだん、この機関銃の引金を引こうとも思いませんよ」

どこからあらわれたのか、二人のうしろに立っているのは、顔の黄いろい若い東洋人だった。

「貴様、どこの何奴どいつか」

「僕の顔をみれば、大よそ見当はつくでしょうがな」

と、かの若い東洋人は、なおもゆだんなく、機関銃の銃口を、パイ軍曹と、ピート一等兵の方へ向けながら、

「僕の名前ですか。これをお二人さんは、ききたいとおっしゃるのですか。さあ、何といったら、一等わかりやすいでしょうね。

そうですね、まあ、僕の名前は、黄いろい幽霊といっておきま

しよう」

二人は、幽霊ということばを聞くと、ぞつとして、首をちぢめた。

「黄いろい幽霊が、こんな戦車の中に、なに用があるのか」

パイ軍曹は、やつと、これだけのこえを出した。

「用事は、いろいろありますがね、まず第一は、お二人さんが召し上った林檎の代金を、こつちへもらいたいのですよ」

「林檎の代金、すると、あの林檎は、君の……」

「そうです。僕が持ってきた林檎です。さあ金を払ってくださいませんか。おやすくしておきますよ」

黄いろい幽霊は、くそおちつきにおちついている。

「金なんか、ない。たとい、あつても誰が払うものか」

パイ軍曹が、断然いきると、黄いろい幽霊のもっている機関銃の銃口が、パイ軍曹の鼻さきへ、ぬーつと、のびてきた。

「お払いになった方が、おためですよ。お金がなければ、他の品物でもよろしゅうございますが……。ぐずぐずしないでください。では、只今、いただきに、うかがいましょう」

黄いろい幽霊は、パイ軍曹とピート一等兵のそばへ、そろそろと、よつてきた。二人は、びっくりして、後じさりした。

「おうごきに、ならないように、引金をひけば、なにもかも、それまでですよ。よろしゅうございますか」

機関銃の引金をひかれては、たまらない。二人は、もううごく

ことをあきらめ、黄いろい幽霊の、するがままに、まかせた。

黄いろい幽霊は、二人のうしろへまわって、ポケットの中をさぐった。お金をとられるか、時計でも持つていくのかと思ったのに、黄いろい幽霊は、そんなものはとらないで、二人のポケットから、大型のナイフをぬきだした。それから、パイ軍曹が腰におびていたピストルも、うばってしまった。

「さあ、もう、ようござんすよ。手をおろしてください。からだをうごかしても、かまいません」

黄いろい幽霊は、満足そうにいった。

パイ軍曹は、面をふくらませながら、

「君は一体、何者だ。幽霊じゃないだろう」

と、かすれたこえでいった。

「幽霊という名は、あなたがたが、僕につけてくださったんですよ。あなたがたは、僕が床にころがした林檎を拾って、たべてしまったじゃありませんか」

「ああ、あの林檎は、君の林檎だったのか。なぜ、林檎をもって、こんなところへ入っていたのか」

「それは、あなたがたが、どうしても勝手に考えてください」

と、黄いろい幽霊は答えない。

「じゃあ、もう用がすんだのだろうから、君は、戦車から出ていってくれ」

「あははは。パイ軍曹あなたは、もうこの戦車の中では、命令権

がないのですよ。これからは、僕が命令しますからねえ」
黄いろい幽霊は、からからと笑うのだった。

幽霊指揮官

「こつちを向きたまえ」

と、黄いろい幽霊は、おちつきはらった声で命令した。
パイ軍曹とピート一等兵は、おずおずと廻れ右をして、黄いろい幽霊の方に向いた。

(あつ、こいつは、まさしく東洋人だ。中国人じゃないかなあ。いや、エスキモー人かも知れない。いやいや、こんな大胆なことをやるのは、日本人より外にない)

これは、パイ軍曹の腹の中であつた。

ピート一等兵の方は、そんなおちついたことを考えるひまがない。

(はあて、この幽霊め、おれたちと、あまりかわらない服装をしているぞ。防寒服を着た幽霊は、はじめてみたよ)

と、ピート一等兵はがたがたふるえている。

「さあ、これからは、私——黄いろい幽霊が、この地底戦車の指揮をとる。それについて不服な者があるなら、一步前へ出なさい」

誰も出ない。そうであろう。黄い幽霊は、そういうながら、わきの下にかかえている機関銃の銃口を、二人の方へ、かわるがわる向けているのだ。不服があるといったら、すぐにも発砲しそうですね。誰が一步前に出るものか、それは自殺するようなものだから……。

「よし、わかった」

と、黄い幽霊は、おごそかに、いった。

「お前たち二人とも、わしが指揮をとることに不服はないのだな。それでは、ただちに命令する。二人とも、操縦席につけ！」

「うへッ」

パイ軍曹とピート一等兵とは、仕方なしに操縦席についた。

「前進せよ。針路は南東だ」

パイ軍曹は、いわれたとおり、戦車を南東へ向けて、出発させた。

エンジンは、ごうごうと音を発し戦車の中には、つよい反響が起った。

「おい、パイ軍曹。針路を、ちゃんと正しくなおせ。お前は、命令をきかないつもりか。きかないつもりなら、ここでお弁当代りに銃弾を五、六発、君の背中にお見舞い申そうか」

「いや、いや、いや、いや」

パイ軍曹は、急にハンドルを切って、黄いろい幽霊のいうとおり、地底戦車の針路を南東に向きをかえた。

「黄いろい幽霊閣下、只今我々は、ちゃんと南東に向け、前進中でありませう。でありますからして、銃弾をわしの背中にくらわせ

ることは、御無用にねがいたいもので……」

と、うしろを向いて、おろおろごえで哀訴あいそした。

「うしろを向いてはならん。それでは前進方向が、くるってくるではないか」

と、黄いろい幽霊は、パイ軍曹を、しかりとばした。

そのそばでは、ピート一等兵が、予備のハンドルを握って、ぶるぶるふるえている。

（おれは、ああいう風ふうに、ぽんぽん叱りつける幽霊の話を、きいたことがないぞ。南極地方には、かわった幽霊が出ると、豆本まめほん

かなんかに、書いておいてくれればよかったのに……)

と、ピートは、どこまでも、彼を幽霊だと思っている様子だった。

一体、この黄いろい幽霊は、どこから来たのだろうか。もちろん、本当の幽霊ではない。

その謎は、この黄いろい幽霊が、戦車の隅に大きな袋の中にいっぱい詰めた食料品をかくしていることによつて、とかれるようだ。あの生々しい林檎は、この黄いろい幽霊が、わざと、床のうえにころがしたものであった。——彼は、密航者だった。

だが、なんと風がわりな密航者よ。わざわざ、南極地方へいく地底戦車の中にしのび入るなんて、ただ者ではない。彼は、一体

なにをするつもりか。それはおいおいとわかってくるであろう。

秘密は御存知ごぞんじ

「おい、パイ軍曹。もっと地底戦車のスピードをあげろ」
黄いろい幽霊は、おごそかに命令をした。

「は。もうこれ以上、出ませんです」
「うそをつけ」

と、黄いろい幽霊は、言下に、パイ軍曹をしかりつけた。

「おい、スピードのことは、ちゃんとわかっているのだぞ。極秘ごくひの陸軍試験月報によれば、地底戦車は、地中では最高三十五キロ、海底では、百五十キロまで出ると発表されているぞ」

「えっ、それまで知っているのですか。——では仕方がない。——ほら、スピード・メーターをみてください。いま、三十三キロまで出ていますよ。もうストップです」

「ごま化しては、いかん。それは地中スピードだ。しかるに、わが戦車は、いま海底を伝って前進しているのではないか。ほら、その計器をみる。岩や土をそぎとる高速穿孔せんこう車輪が、すこしもまわっていないではないか。ほら、こっちのスイッチが、ひらかれたままになっている。ごま化するのは、いいかげんにしろ」

「うへっ」

黄いろい幽霊が、おそろしく地底戦車のことをよく知っているので、さすがのパイ軍曹も、とうとうかぶとをぬいでしまった。

「わかりました。おっしゃるとおりいくらでもスピードをあげます。しかし幽霊閣下は、この戦車を、一体どこへお向けになろうというのですか」

「目的地か。そんなことは、聞かないでも分つていそうなものではないか。ほら、その地図のうえの、ここだ！」

と、黄いろい幽霊は、操縦席の前にかかっている南極地方の地図のうえを、機関銃の先で指さした。そこには、絶望の岬みさきと、妙な地名が書きこんであつた。

「えっ、ここですか。ここは絶望の岬ですよ。いくらなんでも、こればかりは、おことわりいたします」

と、パイ軍曹は、顔色をかえた。

そうでもあろう、この絶望の岬というのは、この前、十九名からなるノールウエイの南極探険隊の一行が、岬へ上陸したのはいいが、そのまま険悪な天候にとじこめられてしまって、半年間も立往生し、ついに全員が、恨みをのんで、死んでしまった魔の場所であった。パイ軍曹が、顔色をかえるのも、無理ではなかった。「いや、行くのだ。行くのがいやなら、すぐこの戦車から下りたまえ」

どこで聞いていたか、黄いろい幽霊は、パイ軍曹の口ぶりをま

ねして下りろといった。

「下りるのが、いやなら、銃弾をくらうかね」

軍曹が、だまつていると、となりに座っているピート一等兵は、しんぱいして、口をひらいた。

「軍曹どの。その幽霊のいうことを聞いた方がいいですよ。幽霊なんてものは、むちやくちやなことをいいだすものですからね、それにさからうと、よくありませんよ。自分の村では、幽霊にさからった者がいて、いつの間にか全身の血が、一滴のこらず、自分のからだからなくなってしまうたのですよ。軍曹どの、だから、さからってはいかんです。もしそうになったら自分は、幽霊と、さしむかえで暮すことになるわけで、こりや、やりきれませんよ」

だが、軍曹は、なにもいわなかった。そのとき彼の眼は、急に
あやしい光をおびたが、とたんに、彼は、

「ヤツ！」

と、さげんで、自分の肩ごしに、前へ出ている機銃の銃身を、
ぐつとつかんだ。

「さあ、つかんだぞ。力くらべなら、幽霊なんかに負けるものか。
こいつさえ、幽霊の手からこつちへとつてしまえばいいのだ。お
い、ピート一等兵、お前も下りてきて、手つだえ！」

うごかぬ筈はず

黄いろい幽霊が手にもっていた機銃で、操縦席の前にさがっている南極の地図を指したために、そばにいたパイ軍曹は、黄いろい幽霊のゆだんを見すまして、機銃をぐつとつかんだのである。力くらべならば、彼はすこぶる自信があつた。

「おい、ピート一等兵。早く、力を貸せ。その幽霊の足を、横に払え！」

だが、ピート一等兵は、蛇へびにかえるにらまれた蛙かえるのように、すくんでしまっている。

「ぐ、軍曹どの。じ、自分は、もういけません。……」

「こら、上官を見殺しにする気か。よおしこの機銃を、こつちへうばいとつたら、第一番にこの幽霊をたおし、その次には、き、貴様の胸もとに、銃弾で貴様の頭文字をかいてやるぞ！ うーん」

パイ軍曹は、顔をまっ赤にして、うんうん呻りながら、機銃をうばいとろうと一生けんめいである。

ところが、黄いろい幽霊はさつきから、一語も発しない。そしてパイ軍曹をしかりつけるまでもなく、軍曹のしたいままに、放つてあるのだ。一挺の機関銃は、二人の手につかまれたまま、じつとうごかない。

「こら、幽霊。そこをはなせ。はなさないと、き、貴様を……」

「ほッほッほッほッ。パイ軍曹、君の腕の力は、たったそれだけ

か」

「な、なにを。うーん」

じつは、パイ軍曹は、さつきからまるで万^{まんりき}力にはさんだよう
にうごかない機銃について、少々こまっていたところであった。

「さあ、パイ軍曹。君に、これがとれるものなら、もつと倍くら
いの力を出したまえ」

「な、なにを。うーん」

パイ軍曹は、うんとがんばって、死にもものぐるいの力を出して、
機銃を前にひっぱったが、機銃はあいかわらず、巖^{いわお}のようにびく
ともしない。軍曹の額^{ひたい}からは、ぼたぼたと、大粒の油あせが、た
れる。

「力自慢で、わしが負けるなんて、そ、そんなはずはないのだが……」

幽霊は、わざとらしい咳せきばら払いをして、

「戦車の中には、食料品が不足だというのに、無駄に、力を出していいのかね」

「えっ」

この戦車の中には、食料品の貯えたくわがないことは、はじめからしっていた軍曹だった。だから、黄いろい幽霊のことばは、パイ軍曹の腹へ、大砲のごとく、こたえた。彼はとたんに機銃から、ぱつと手をはなした。

「それで、もともとだ」

と、黄いろいろ幽霊は、いった。

パイ軍曹は、なんだか急に、眼の前がくらくらなくなったように感じた。それは、空腹のところへあまり力を出しすぎたためだ。

「君でなくとも、だれがやってみても、この機銃を人力で取りはずすことはできないよ。このとおり、大きな金具で、はさまれているのだからなあ。ほッほッほッ」

黄いろいろ幽霊は、おかしさにたえられないという風に、大笑いをしたが、軍曹が、うしろをふりかえってみると、機銃のお尻のところ、えんがい掩蓋固定の締め金具の間に、うまくはさ挟まれていたのである。それでは、軍曹は、堅い鋼鉄と相撲をとるような、とても勝つ見込みのない力くらべを、していたことになる。

「ああッ」

パイ軍曹は、あきれかえって、自分がいやになった。とたんに、からだが綿のように、ふにやふにやになったように感じた。

「ほッほッほッ。戦車隊員ともあろうものが、そんな不注意で、御用がとまるとおもうか」

黄いろい幽霊は、一本するどく、軍曹をきめつけたが、そのときどうしたわけか、地底戦車は、急にかたむきはじめたとおもう間もなく、あつといううちに、大きくでんぐりかえりをうち、とたんに車内の電灯が、すーつと消えてしまった。三人は、それぞれ、かぼちや南瓜のかごをひっくりかえしたように、ごろごろと投げだされた。さあ、一体、何事が起ったのであろう。

三つの場合

海底は、まっくらであつた。

だから、なにごとが起つても、皆目みえなかつた。

みえなかつたから、よかつたものの、もし海底に、だれかすんでいる者があつて、いま地底戦車が、断崖だんがいから、まっさかさまになつて、墜落したそのものすごい光景をみていたとしたら、その人は、きつときもをつぶしたにちがいない。地底戦車は、石せつか

塊いのように、ころげおちたのであった。あの高い断崖から下へおちて、戦車がこわれなかつたことが、じつにふしぎというほかない。

それもそのはず、ドイツとともに、世界に一、二を争う工業国アメリカが、そのすぐれた技術でつくりあげた極秘の地底戦車であつた。その丈夫なことといつたら、おそろしいほどだ。

それはいいが、地底戦車の中の三人は、一体、どうなつたであらうか。

戦車の中は、電灯が消えて、それこそ、真の闇であつた。

なんの音も、きこえない。

三人とも、あたまを、どこかかたいかべか、器械にぶっつけ、

脳みそを出して、死んでしまったのであろうか。

いや、そうでもなかった。三人の心臓は、いずれもかすかではあるが、それぞれうごいていたのである。が、三人とも、死骸のようになつて、うごかない。自分がいま、どこにいるか、それさえ分らない。三人とも、気がとなくなつてしまつたのだ。

だが、これつきり、三人とも、死んでしまふではなさそうだ。今に、一人一人、われにかえつて、起きあがるだろう。しかし、それから先、どうして生きられるか、そいつは分らない。

だれが、先に、気がつくか。——これは、たいへん重要な問題だつた。

もし、黄いろい幽霊が先に息をふきかえして気がつけば——幽

霊が、息をふきかえすというのも、へんであるが——すべて、戦車が墜落する前のおりであろう。すなわち彼は、とにかくパイ軍曹とピート一等兵をたすけおこして、それから後は、また機関銃をひねくりまわして、彼の好む方角へ前進するであろう。

だが、これと反対に、パイ軍曹が、先に気がつけば、彼は、ピート一等兵を靴の先でけとばして、眼をさませ、そして二人で力をあわせて、黄いろい幽霊をしばりあげ、ひどいしつぺいがえしをするだろう。幽霊をはだかにして、天井から吊り下げることぐらいは、命令しそうなパイ軍曹だった。これは、さつきまで勝者であった黄いろい幽霊にとって、まことに気の毒な場合であった。

もう一つの場合が、残っている。それは、ピート一等兵が、ま
つ先にわれにかえる場合である。大きなからだとは反対に、たい
へん気のよい彼は、一体どうするであろうか。この場合ばかり
は、全く見当がつかない。

幸か不幸か、事實は、最後にのべた場合をとつたのである。ピ
ート一等兵が、うーんと呻うなつて手足をのばし、われにかえつたの
であつた。さあ、どんなことになるやら？

脳みそだ！

ピート一等兵は、しばらく、ひきつづき、呻った。

「うーん。ああッ」

それから、またしばらくして、

「ううーん、ああッ」

こんな風に、五、六回やっているうちに、彼の鼻が、小犬のそれのように、くんくんと鳴りだした。

「ああッ、ああッ、あーあ。はて、おれは、さつきまで、一体なにしていたのかなあ。おや、これは妙だ。へんな匂においがする」

ピート一等兵は、鼻をくんくん鳴らしつづけた、鼻から先に、われにかえったピート一等兵だった。

「やっぱり、そうだ。このうまそうな匂いは、林檎りんごの匂いだ。おれは、林檎畑に迷いこんだのかなあ。くんくんくん」

しばらくすると、彼は、ふと気がついて、両眼をひらいた。が、まっくらであった。

「おや、まっくらだ。はて、おれは、こんなにまっくらな林檎畑があることを、きいたことがないぞ」

そのうちに、彼は、しくしく泣きだした。

「うん、わかったわかった。ここは、冥途めいどなんだ。死後の世界なんだ。だから、こんなに、まっくらなんだ。かねて冥途は、くらいところだときいたが、林檎畑まで、まっくらだとは、おどろいたもんだ。しかし、はてな、おれはなぜ、死んでしまったのかな」

彼は、うでぐみをして、考えだした——つもりであった。それはそんな気がしたばかりで、ほんとは、うでぐみもなんにもしないで、やはり死人同様、長くなつてのびていたのだ。

「そうだ、おもいだしたぞ。地底戦車が、ぐらつと横にかたむいたんだ。それで、おれはおどろいて、ハンドルに、しがみついたはずだ。すると、とたんにからだがすーつとぬけだして、いやというほど、ごつんと、あたまをぶつつけてしまった。それつきり、気をうしなつてしまったのだ。致命傷は、あたまだったはず……」

そのとき、ピート一等兵の手は、ようやくうごきだすようになった。彼は、右手をのばしておそるおそる、じぶんのあたまにもつていった。

ぐしやり！

ぐしやりとしたものが、指の先にふれた。

「あつ、いけねえ。脳みそに、さわつちやった。おれのあたまは、ずがいこつ頭蓋骨がこわれて、ぐしやぐしやになっているぞ。あ、あさましや……」

ピート一等兵は、いきなり赤ん坊のようにわあわあ泣きだした。泣きながら、彼は、脳みそで、ベとベとになったじぶんの手を、鼻さきにもっていった。とたんに、非常なおどろきにあつて、泣きやんだ。

「あら、あやしやな。おれの脳みそは、林檎の匂いがするぞオ！」

ああ十五個！

「いや、これで、よく分つたよ」

彼。ピート一等兵は、あんがい、おちついたこえで、ひとりごとをいった。

「むかしから、しんるいの奴や友だちがおれをつかまえて、お前は、どうも脳がどうかして、あたまが、はたらかない。お前の脳みそは、どうかしているんじゃないかと、よくいわれたもんだが——」

と、そこで彼は、大きなため息をついて、

「でも、まさか、おれの脳みそが、林檎でできているとは、気がつかなかったね」

もし、そばで、パイ軍曹が、ピート一等兵のひとりごとをきいていたとしたら、彼は軍曹から、耳ががーんとするほど、叱りとばされたことであろう。いまパイ軍曹は、叱りとばすどころではなく、人事不省じんじふせいにおちいつていたのは、ピート一等兵のため、はなはだ幸運であった。

「おれは、へそのおを切つてから、こんなにおどろいたことは、はじめてだぞ。しかし、このように脳みそが、はみだしてしまつては、おどろいたつて、もうおそい。えい、しようがない。こう

なれば、やけくそだ。じぶんの脳みそを、なめちまえ」

ひどい奴があつたものである。ピート一等兵は、指さきについたものを、口のところへもって行って、舌でぺろぺろなめはじめた。

「やあ、こりやうまい。いやあ、すてきに、うまいぞ。おれの脳みそは、まるで、おしつぶされた林檎みたいだ」

といったが、林檎の味がするのも道理である。ピート一等兵は、林檎の袋の中に、頭をつつこんでいたのである。彼は、じぶんの脳みそとばかりおもって、じつは、じぶんのあたまの下におしつぶした林檎を、指さきにとつて、一生けんめい、うまいうまいと、なめていたのである。そのことは、やがて彼も、気がついた。な

ぜならば、指をなめたあとで、手をあたまのところへもつていくうちに、まだつぶれない林檎に手がふれた。

「おやツ、こんなところに、おれの脳みその塊かたまりが、落っこつてらあ」

脳みその塊ではない。ほんものの林檎であつた。彼はもうその区別などは、どうでもよかつた。彼は、やたらに、林檎を喰つた。つきからつきへと、手をのばして、林檎を、丸かじりして、腹の中におさめた。

合計十五個の林檎を食べおわつたときには、さすがの彼も、ほんとのことを悟つていた。これは林檎であつて、脳みそではない。なぜなれば、大きな林檎が十五個もはいるような脳なんて、きい

たことがないからである。そんな大きな頭の人間だったら、じぶんのあたまには、とても陸軍制式の鉄帽が、すっぽりはいるわけがない。

わけは、さっぱり分らないが、彼は、たくさんの林檎を食べたことをはつきり知った。そして、元気になった。そこで、ふらふらと立ち上った。二三步あるいたとき、爪つまさきで、なにかかたいものを、けとばした。

「あ、いたッ！」

とたんに、ぱつと、車内に電灯がついた。スイッチかなんかを、けとばしたものらしい。彼はおどろいて急に明るくなった車内を見まわした。

「あ、あ、あ、あッ！」

ピート一等兵は、再度のおどろきにぶつかつた。おどろくべき車内の光景！

戦車は、天井と床とが、全くあべこべになっている。

操縦席が、天井からぶら下つているかとおもえば、電灯が足あしも許とについているというさきわぎだつた。

それよりも、おどろいたのは、上官パイ軍曹の姿だつた。彼は、天井から、塩びきの鮭さけのように、さかさまになつてぶら下つて氣絶している。一方の足が操縦席にはさまり、そのまま、ぶら下つているのだ。お世辞せじにも、勇しい恰好かっこうだとはいえない。

ピート一等兵は、顔をむけかえて、もう一人の人物、黄いろい

幽霊の居場所を、さがしもとめた。

ところが、黄いろい幽霊は、どこへいったものか、見つからない。
い。

「おやおや幽霊め、とうとう妖怪変化ようかいへんげの正体をあらわして、逃げてしまったかな」

そういつて、ピート一等兵が、ひとりごとをいつたとき、彼の足許に一本の手がころがつているのを発見した。電灯の反対でさつきは、よくみえなかつたのだ。

「うあッ、こんなところに、だれが腕をおとしていつたんだろう？」

といつたとき、その腕が、急に、ぐーつと、うごきだした。怪

また怪！

まわみぎ
廻れ右！

「ひやツ！」

ピート一等兵は、その場に、とびあがった。元来、幽霊が大きいので、ピート一等兵だったから、おどろくのも、むりではなかった。

だが、あまりおどろきすぎて、前後の見さかしくなるとびあが

つたものだから、大男の彼はいやというほど、頭を器械の角でぶつつけて、うーんと眼をまわして、その場にのびてしまった。どこまでも、世話のやけるピート一等兵だった。

ぐーつとのびた一本の腕が、やがて床——ではなかった、下になつた天井をおさえた。その腕のうえに、肩が生え、それから、頭が生えた。黄いろい幽霊の頭であつた。

そこには、黄いろい幽霊が倒れていたのに、そそっかしいピート一等兵は、彼の一本の腕だけ見たのである。

「しまった」

彼は、そう叫んで、とび起きた。そして、そこに落ちていた機関銃をひろつた。すぐさま、彼は銃をかまえて、あたりを見廻し

た。

「なあんだ、皆、まだ、伸びていたのか」

パイ軍曹は、塩びきの鮭のように、ぶら下っていたし、ピート一等兵は放りだされた大根だいこんのように倒れていた。

黄いろいろ幽霊は、しばらく兩人をながめていたが、やがて、うなずくと、まず、パイ軍曹を抱き下ろして、活を入れてやった。

「うーん」

パイ軍曹は、やっと気がついたが、黄いろいろ幽霊を見ても、もうとびかかってくる元気がなかった。

黄いろいろ幽霊は、次に、ピート一等兵を、介抱かいほうしてやった。

ピートは、気がつくときよろきよろあたりを見まわしたが、

「あれツ、どうしたのだろう。いつの間にやら、こんども生きかえつて、おれが助けられるなんて、さっきのは、あれは夢だったかしらん」

と、げげんな顔。

「どうだ、パイ軍曹にピート一等兵。もう、いい加減に、こりたであろう。反抗するのもいいが、このうえ反抗すると、こんどは、いよいよ生命いのちをもらつちまうぞ。ここで、どつちにするか、はつきり返事をしろ」

黄いろい幽霊は、おごそかなこえでいった。

パイ軍曹とピート一等兵とは、顔を見合せた。そして、おたがい、うなずきあつた。

(どうだ、こううるさくては、かなわんから、降参してしまおうじゃないか。せめて、われわれが地上に出られるまで……)

(へい、大賛成です!)

二人は、そんな風に、早いところ、眼と眼とで、相談をしてしまった。

「ええ、黄いろい幽霊どのに申し上げます。以後両人は、貴殿きでんを、絶対に上官だと思い、服従いたします。その代り、貴殿のお力をもちまして、どうかわれわれを、再び地上に出していただいて、もう一ぺんだけ、陽ひの光や、鳥の飛んでいるところや、それから、酒さかびん壇たんやビフテキまで見られますように、どうぞどうぞお助けください。アーメン」

二人は、黄いろい幽霊を、神様あつかいにまで、してしまった。「ふん、そういう気なら、願いは、聞き届けてやる。きつと、今いったことを、忘れるなよ」

「は、決して忘れませぬ。アーメン」
 どこまでも、黄いろい幽霊は、神様あつかいであつた。

快男児 沖島 おきしま

この黄いろい幽霊とは、そも、何者であろうか。

これは、彼の自らいうように、幽霊ではない。そうかといって、アーメント、あがめたたえられているように、神様の化身でもない。

おきしまはやお
沖島速夫

——それが、この黄いろい幽霊の本名だった。

その名で分るとおり、彼は日本人であったのである。そのむかし、彼は、苦学生であつて、アメリカで皿洗いをしていた。しかし、だんだん世界の情勢がかわつて来て、それまでは、それほどでもなかつたアメリカ人が、さかんに日本いじめをやりだした。通商条約を、とつぜんやぶつたり、急に石油や器械を売らなくなつたり、大艦隊を日本に一等近いハワイに集めたりして、さかんにおどしにかかった。アメリカは、すっかり日本いじめに夢中に

なつてしまった形である。そんなことが、沖島速夫を、すっかり怒らせてしまったのだ。彼は、だんだん、アメリカ人のために皿なんか洗つてやるものかと思つた。そして、腕は細いが、ひとつ出来るだけの智慧ちえをはたらかして、アメリカ人の荒ぎもをうばつてやろうと決心したので。

そこで彼は、だれにも、それを告げず、職場をはなれた。今まで働いて、一生けんめいためた金をもつて、彼はしばらく町々をうろついたが、或るとき、地底戦車が秘密に南極へいくことを、かぎつけたのであつた。これはいいことをきいたと、彼は思つた。そこで俄にわかに決心して、或る夜ひそかに、苦心に苦心をかさねて、ついに地底戦車の中に、もぐりこんだのであつた。そのとき、一

挺ちようの軽機関銃と、大きな袋に入った林檎とを、その中へかつぎ込んだ。

戦車の中は、案外ひろびろとしていたから、彼は、べつに息もつまらないで、暮していることができた。そのうちに、例の遭難事件となり、パイ軍曹とピート一等兵とが、とびこんできたのである。そして、とんださわぎが、この戦車の中ではじまることとなったのである。

沖島速夫は、もちろん、生命をなげ出していた。別に、この地底戦車をスパイするつもりでやったことではなく、ただ、太平洋の彼方かなたで、真の日本人を知らず、ひとりよがりであるアメリカ人たちに、日本人の意気を見せて、ちよつとおどろかせてやりたか

つただけのことである。

南極地方へ上陸したのち、地底戦車の中からおどり出して、

「アメリカさん。ばあーッ」

と、やりたいだけのことであつた。ところが、ひよんなことから、その戦車をつんでいた船が沈没してしまつたため、たいへんな冒険をやるようなこととなつた。

助かるか助からないか、沖島速夫自身も、全く知らない。しかし彼は、むかしから、いかなるときにも、おちつきを失わない男だつたから、生命なんかのことで、取り越し苦勞をするのは馬鹿者のすることだと決め、自分は生命を神様にでもあずけたつもりで、そんな心配はごめんこうむつて、ただ斃^{たお}れてのちやむの精神

で、ここまでやって来たのである。

ところが、パイ軍曹もピート一等兵も、がらは大きいし、いばることも知っているが、今地底戦車が南極の海中に沈んでいると思うと、からいくじがなくなって、とうとうここで、沖島速夫を神様のようにあがめ、そして神様としておすがりするようになつてしまった。心の弱いものは、いつでも、このように負けてしまう。

（絶対に反抗しません！）

こんどこそ、いよいよ本気で、二人は黄いろい幽霊に降参してしまつたのである。

速夫は、勝者だ。

だが、こうなると、出来るなら、二人を助けてやりたいと思つた。そして、なにげなく彼は、さかさまに下つている深度計に眼をやつたが、

「おやッ！」

とばかり、心の中でおどろいた。——深度計は、零れいをさしていたのである。

天井の怪音

速夫は、始め、深度計が、こわれてしまったのかと思った。

しかしよく他の器械を見てみると、そうでもないらしい。

しからは、深度計が零をさしているのは、この地底戦車が、逆さにひっくりかえっているせいであろうかとも思った。だが、それもちがう。この深度計は逆さにひっくりかえろうが、針が他を指すさような構造のものではない。

すると、正しく深度は零なのである！

（深度が零というと、この戦車の下に、水がないということであるが——それでいいのかな）

達夫が、ふしぎそうに、深度計を見ているものだから、パイ軍曹もピート一等兵も、そばへよってきて、ともに深度計のうえを

ながめるのであった。そして、やはりふしぎだという顔をした。

「どうだね、パイ軍曹にピート一等兵。この深度零と出ているのを、どう考えるか」

と、速夫はきいた。

「さあ……」

「計器に水が入ったかな」

二人の答は、はなはだ、なっていない。

「分らないなら、いつてやろう。この地底戦車は、地上に出ているんだ」

と、速夫は、ずばりといった。

「えっ。地上に出ておりますか、あの、この戦車が……」

ピート一等兵が、眼を丸くした。

「ばかばかしい、深海の底におちこんでいたものが、いつの間にか地上にあがっているなんて、そんなことがあつてたまるか」

と、パイ軍曹は、ピート一等兵を叱りつけた。そのとき、速夫がいった。

「そうだ。われわれの感じとしては、まだまだ深海の底にいるよ
うな気がする。しかし、この深度計は、たしかにこわれていない
のだから、この上は、深度計が示していることを信ずるのが正しい。
わけはわからないが、たしかに、この戦車は、地上に出ているのだ」

「そんなばかばかしい夢みたいなのが……」

「全く、全くだ！」

二人は、どつちも、速夫のことばを信用しない。

そこで速夫は、

「じゃ、僕は、この地底戦車の扉をあけて、外へ出てみるから……」

「ああ待つてもらいましょう。扉をあけりや、そこから水がどつと入ってきて、われわれはたちまちお陀仏だ^{だぶつ}」

「じゃあ、助かりたくないのか」

「扉をあけりや、とたんに、死んでしまいますよ。助かるどころの話じゃありませんよ。これは、わしの永年の経験からいうのだ」と、パイ軍曹は、なかなか自信あり気である。

意見は、こうして、二つに分れた。

一体、どっちが本当か？

そのときである。不意に、この戦車が、かたんと揺れた。戦車の中は地震のようである。

ところが、ふしぎにも、戦車は、ますます揺れだし、そしてますます傾くのであつた。三名の者は、とても立っていられなかつた。てんでに、器械や椅子につかまつて、こらえている。まさか、地震でもなからうに。

そのうちに、急に、動揺がとまった。

「おお、どうした！」

「おや、いつの間にか、天井と床とが、あべこべになつて、戦車

は、とうとうもどおりになったぞ！」

戦車は、半廻転したのだった。

トン、トン、トン。

妙な音が、そのとき天井の方から、聞えてきた。

「あれは、何の音！」

と、ピート一等兵は、また新たな恐怖の色をうかべた。

トン、トン、トン。

ふしぎな音は、しきりに、天井の方から聞えるのであった。

ピートの失敗

「パイ軍曹どの。自分は、もう死んだ方がましです。このうえ、心臓がどきどきしては、心臓麻痺まひになってしまいます」

これは、大男のピート一等兵が、からだに似合わぬ悲鳴である。「こら、ピート一等兵。そんな弱音をはいちや、幽霊指揮官どのに、笑われるじゃないか」

「でも、自分はもう、このとおり、からだ中から、脂あぶらがぬけちまつて、もうあと、いくらもちません」

「え、からだの脂がぬけたって」

「はい。うそじゃありません。このとおり、ズボンの下から、た

らたら脂が、たれてくるのです」

「そうか。本当なら、こいつは一命にかかわるぞ。どれ、見てやろう」

と、パイ軍曹は、ピート一等兵のズボンの下をまくって、しさいに見た。

「おや、こいつは、ひどく、たれている。ふん、かわいそうだな。これじゃ、もう、助かるまい」

「軍曹どの、自分は、もういけませんか。もう、だめでありますか」

「もう、いかんぞ。どうも、くさい。いやにくさい。きさまは、からだが大いせいか、鯨くじらの油みたいな脂を出しよる」

と、パイ軍曹が、鼻をつまんだ。

「え、鯨の油みたいなおいがしますか、はてな？」

ピート一等兵は、そういつたかと思うとにわかには、あわてて、自分の毛皮の服の胸をあけて、中へ手をつっこんだ。

「うわーッ、いけねえや」

「おい、ピート。何ということをする……胸の中が、どうかしたのか」

「あははは。大失敗でさ。わけをいうと軍曹どのに叱られ、そしてここにおいででの幽霊どのに笑われてしまいます」

「ははあ、きさま、また欲ばったことをやったな。服を開いて、中をみせろ」

「はい、どうも弱りました」

ピート一等兵は、悄しよげ気げている。

「やっぱり、そうだ。きさま、鯨げいゆ油ゆの入いつている缶かんを、盗ぬすんでい
たんだな。どうするつもりか、鯨油げいゆを、懐中かいちゆうに入れて」

「どうも、弱よりました。まさかのときは、これでも、腹はらの足たしに
なると思おもったものでは……」

「なに」

「つまり、鯨油げいゆですから、こいつは、魚いしの脂あぶらです」

「鯨は、魚いしじゃない」

「そうでしたな。元へ！ 鯨は、けだものの脂あぶらですから、石油と
はちがって、食たべる——いや、飲のめる理屈りくつであります」

「あはア、それで、飲むつもりで、かくしていたのか」

「はい。ところが、あのとおり、戦車の中で、あっちへ、ごろごろ、こつちへごろごろとやっているうちに、缶がこわれて、鯨油がズボンの中へ、どろどろと流れだして、こ、このていたらく……」

「なんだ、そんなことか。お前は、幸運じゃ」

「軍曹どの。からかつちや、いかんです」

「からかつちやおらん。もしもその脂がお前のからだから流れ出した脂だったら、今頃はどうなっていたと思う」

「へい。どうなっていましたかしら」

「わかつていないじゃないか。そんなに脂がぬけ出しちや、お前は

今頃は冷くなつて、死んでいたろう」

「冗談じゃありませんよ。はつくしよん」

さつきから、^{かたわら}傍で、あきれ顔で、二人の話聞いていた沖島速

夫が、

「ピート一等兵。早く、前をしめろ。風邪^{かぜ}をひくじやないか」

「へーい、指揮官どの」

氷原

呑気^{のんき}な二人のアメリカ兵には、沖島も、すっかり呆^{あき}れてしまっ
た。

そのうちに、一旦^{いったん}とまっていた戦車の天井の、とーん、とー
んという音が、また聞えだした。

とーん、とーん。

「あ、また始まった」

ととーん、とーん。

「おや、あれは、モールス符号だ」

パイ軍曹が、急に目をかがやかせた。

「おや、開けろといっている。ふん、生存者はないか。誰か、上
から呼んでいるんだ。おれたちは、助かるかもしれん」

ピート一等兵は、おどりがあがった。

「気をつけッ！」

沖島速夫が、大きなこえで、どなった。

二人のアメリカ兵はびっくりして、直立不動の姿勢をとった。

「だから、さつきから、僕は、この戦車の扉を開けろといっているんだ。さあ、早く開けろ」

「開けても、大丈夫かなあ」

「大丈夫だ。水の中じゃない。うそだと思ったら、中から信号をして、外には水があるかないか、たずねてみる」

沖島は、深度計をみたとき、この地底戦車のまわりが、どんな状態にあるかを、察していた。そこへ外から信号があつた。彼は、

そのとき、或る覚悟をした。そして二人のアメリカ兵が、鯨油のことで、いい争っている間に、持っていた機銃を、防寒服の中にしまいこんだり、戦車をうごかすのに、ぜひ無くてはならぬ発火器の鍵を、服の或る部分にしまいこんだりして万端ぼんたんの手配を終つてしまつたのであつた。

さあ、もうこれでいい。なにが来ても、おどろくことはない。

パイ軍曹は、ピート一等兵の肩車にのつて戦車の蓋ふたを中から、しきりにとんとんと叩いて、外部と連絡をとつていたが、やがて、

「うわーッ、こいつは、たいへんだ」

と叫んで、おどりがあつた。

「あつ、軍曹どの。そんなに、あばれちゃあぶない」

といううちに、二人は折り重なって、床のうえに、ひっくりかえった。

「おお、痛い。ピート一等兵。早く、扉をあけろ。外には、我が軍が、待っているそうだ。早くしろ」

「わが軍が……。ああ痛い。腰骨が、折れてしまったようです。軍曹どの。あなたにおねがいます。自分には、出来ません」

「わしに出来るなら、きさまに頼みやせん」

パイ軍曹は、洩面をつくっている。

「じゃあ、僕があけよう」

沖島は、そういつて、天蓋てんがいのハンドルに手をかけて、力一杯ぐるぐるとまわした。

すると、さつと、白い光が、外からさしこんできた。それともにも、新しい空気が流れこんだ。サイダーのように、うまい空気であった。

「おお生きていたか」

外から、アメリカ訛りの英語がきこえた。

武勇伝

地底戦車中から、はいだして、今、三人は、氷上に整列してい

る。

前には、天幕が、四つ五つ張られてある。あたりは、一面のひろびろとした氷原であつた。

「一番から、官姓名を名のれ」

三人の前には、一団の防寒服を身にまとつた軍人が、立ち並んで、三人をじつと睨にらんでいる。その中の一人が、このように号令をかけた。

「陸軍戦車軍曹ジョン・パイ」

「陸軍戦車一等兵アール・ピート」

「……」

一同の視線が、三人目の沖島のうえに、集中された。

「おい、なぜ、黙つとる。早く官姓名を名のらんか」

「……」

「おい、お前は聞えないのか」

「こいつは」

と、パイ軍曹が、いおうとするのを、沖島は、皆までいわせず、

「地底戦車長、黄いろい幽霊」

「なに、もう一度、いってみろ」

「この地底戦車長の黄いろい幽霊だ」

「黄いろい幽霊！ ふざけるな」

すると、パイ軍曹が、さつと前へ出て来て、沖島をすろどく指

し、

「こいつは、中国人——いや、日本人の密偵にちがいありません。この戦車の中に、しのびこんでいたので、自分が捕虜ほりよとなしたものであります」

「え、日本人？ そいつは、たいへんだ。それ、取りおさえろ」

「別に、逃げかくれはせん。逃げたつて、この氷原を、どこへ逃げられるだろうか。アメリカ兵は、思いの外あわて者が多い」

「なに！ かまわん、しばれ」

「いや、待て！」

前に進んだ一団の中で、どうやら一番えらそうに見える人物が、こえをかけた。

「は」

「その、黄いろい幽霊がいうとおり、こんなところで、逃げだしても、食糧がないから、生命がないことが分っている。だから、ことさら取りおさえる必要はない」

「しかし、閣下……」

「なに、かまわん。余よに、思うところがある。そのままにしておけ」

その人物は、悠々としていた。

パイ軍曹は、げげんな顔だ。

彼は、そつと、号令をかけた将校のところへ近づいて、たずねた。

「みなさんがたは、南極派遣軍だということは、さつき戦車の天

蓋を叩いて信号したときに、承知しましたが、あそこにいられる
えらい方は、一体だれですか」

「あの方か。あの方を知らんか。リント少将閣下だ」

「えっ、リント少将閣下」

「そうさ、南極派遣軍の司令官だ」

「ええっ、すると、ここはリント少将のいられる基地だったんで
すね」

「ふん、そんなことが、今になって分ったか」

パイ軍曹は、叱られている。

リント少将は、沖島速夫の前へ歩みより、

「黄いろい幽霊君。パイ軍曹のいうことに間違いはないか」

と、しずかなことばで、たずねた。しかし少将の眼は、鷹たかの眼のように、光っていた。

「閣下。すこし話がちがうようです。正直者のピート一等兵に、おたずね下さい」

と、沖島は、ピートを指ゆびさした。

「それでは、ピート一等兵。どうじゃ」

ピート一等兵は、さつきパイ軍曹しやべが喋しゃべっているときから、しきりに拳こぶしをかためたり口をもぐもぐさせて、いらだっていたが、

「はい、リント大將閣下」

と、リント少將を大將にしてしまい、

「正直なところを申し上げますと、すみませんが、パイ軍曹どのの

いうことは、すべて嘘うそつ八ぱちでありまして、ソノ……」

「嘘か。それで、どうした」

「ソノ、つまりこの地底戦車が、遭難船の船底をぬけおちまして、海底ふかく沈没しましたときから、自分は敢然、先頭に立って、この戦車を操縦しつづけたのであります。ぜひともこの大困難を克服しまして、この貴重なる地底戦車を閣下のおられるところまで、持ってこなければならんと大決心しまして、パイ軍曹どこのこの幽霊どのはげましながら、ついにかくのとおり閣下のまえまで乗りつけることに成功しましたわけで、その勇敢なる行動については吾われながら……」

と、ピート一等兵は、はなはだ正直でないことをべらべら喋り

だして、止めようもない。

投獄とうごく

リント少将は、さすがに、南極へ派遣されるほどの名将だけあって、早くも、わけを察した。

少将は、幕僚の参謀たちをふりかえり、

「どうだ、事情は、のみこめたらう。要するに、パイ軍曹とピート一等兵とは、この地底戦車の中にとじこめられ、蒼あおくなつてい

た。そのとき、戦車の中にかくれて、密航していたこの黄いろい幽霊と名のる男が、二人をはげまして、ともかくも、地底戦車を、ここまで、のりあげてきたのだ。そうではないか」

参謀たちも、このリント少将のことばに、うなずいた。

少将は、なおも、ことばをついで、

「地底戦車は、一台のこらず、海底にしずんでしまったことと思つていたが、こうして一台でも助かったのは、わがアメリカ陸軍のため、よろこばしいことだ。われわれは、この一台を、できるだけうまく使つて南極におけるわれわれの仕事を、やりとげなければならぬ」

参謀たちは、また大きくうなずいた。

「ところで、この黄いろい幽霊の始末だがどうしたものであろう」
参謀たちは、顔を見合せたが、

「軍司令官閣下。こいつは、地底戦車の秘密を知った奴ですから、
今すぐに、銃殺してしまうべきであります」

「自分も、同じことを考えます。こいつは日本のスパイに、ちがいありませんから、殺してしまうのが、よろしい。このまま、生かしておく、またどんなことをするかもしれない。日本人という奴は、大胆なことをやるですからなあ」

みんな、沖島を早く銃殺せよというのだ。

少将は、そこで顔を、沖島の方へむけなおして、大胆不敵な彼の面を、しばらくじっとみつめていたが、

「おい、黄いろい幽霊。本官が、日本の将校なら、君の勇敢な行動を大いにほめてやるところだが、余はアメリカの軍司令官だから、そうはいかんぞ。只今から、君は、監房につながれることになった。もうあきらめて、おとなしくしているように」

沖島速夫に、ついに、きびしい刑罰が、きまつたのであった。しかし彼は、べつに顔色をかえるでもなし、にこにこして、リント少将のことばを、きいていた。

それから沖島は衛兵にまもられて、監房につれていかれた。

監房は、氷の中にあつた。つまり、氷を下へ掘つて、氷の地下室が出来ている。そこに、氷の監房がつくられてあつた。

監房の扉は、木でこしらえてあつた。のぞき窓も、やはり木で、

くみたててあつた。氷と木材との合作がっさくになる監房であつた。

沖島速夫は、このふしぎな監房の中に、押しこめられたのであつた。

なかは、いたつて、せまい、やつと、二メートル平方ぐらいであつた。

空気ぬき兼明けんめいりりの天窗が、天井に空いていた。

この監房は、ふしぎに寒くない。氷の中にとじこめられているのだから、冷蔵庫の中に入っているようなもので、さぞ寒かろうと思つたのに、かえつて温い感じがしたのである。

沖島は、缶詰をいれてきたらしい箱のうえに、腰をおろした。彼はべつに悲しんでいる様子もなかつた。

「さあ、ここですこしねむるかな」

彼は、腰をかけたままいねむりはじめた。どこまで大胆な男であろう。

しばらくねむった。そのうちに、彼をよぶものがあつた。

「おい、黄いろい幽霊！」

はて——と、眼をさますと、窓のところにも二つの顔が、沖島の方をのぞいていた。

一つは、衛兵の顔、もう一つの顔は、ピート一等兵の大きな顔であつた。

「おい、コーヒーをもつてきてやったよ」

ピートがいった。

友情

コーヒーをもってきてやった——と、ピート一等兵はいった。そして窓のところから、うまそうな湯気ゆげのたつコーヒーうっわの器わが見えた。

沖島は、腰かけから立って、窓のところへいった。

「コーヒーを、もってきてくれたのか。どうも、すまんなあ」

「すまんことはないよ。わしは、ここだけの話だが、お前に、感

謝しているよ……」

「おい、ピート一等兵。ことばをつつしめ」

と、衛兵が、よこで、こわい顔をした。

「だまっている、お前には、わからないことだ」

とピートは、衛兵につつかかった。

「そのわけは、お前がいなければわしは、地底戦車の中で、腹ペこの揚句、^{あげく}ひぼしになって死んでしまったことだろう。お前のおかげで、こうして、氷の上にも出られるし今も、たらふくビフテキを御馳走^{ごちそう}になったりして、まるで夢をみているような気がするのだ、これは、一杯のコーヒーだけけれど、やっとごま化して、持ってきたのだよ。さあ、のんでくれ」

「や、ありがとう」

「ピート一等兵、待て。衛兵たるおれが、承知できないぞ。そういうことは、禁じられている」

衛兵が、苦情をいった。軍規上、それにちがいないのである。

「お前にや、わからんといっているのだ。お前、気をきかせて、ちよつと、向うをむいている。コーヒーをのむ間、その辺を散歩してこい」

そのへんを散歩してこいといっても、せまい氷の廊下が、ほんのちよつぴりついているだけである。散歩なんかできない。

「おい、衛兵。わしの腕の太いところをよく見てくれ」

ピート一等兵は、肘^{ひじ}をはり、衛兵にのしかかるように、もたれ

かかった。

「ピート、分っているよ。いいから、おれが向うをむいている間に、早いところ、囚人にコーヒーをのませろ」

そういつて、衛兵は、向うをむいた。

「ほう、やっと、気をきかせやがった。はじめから、そうすれば、世話はなかつたんだ。ほら、黄いろい幽霊、コーヒーだぞ」

コーヒーのコップは、ようやく、窓の間から沖島の手にわたされた。

「やあ、どうも、すまん」

「わしとお前との仲だ。そう、いちいち礼をいうには、あたらな
い。さあ、これだ。これをとれ」

コーヒーだけかと思つていたら、ピート一等兵は、毛皮の外がいと套うの下から、ビフテキを紙につつんだやつを、すばやく沖島に手渡した。

「すまん」

「こら、なにもいうな。——ほら！」

「えっ」

酒の壘びんが一本。

沖島の眼が、涙にうるんだ。ピート一等兵のこのおもいがけない友情が、たいへんうれしかった。

酒壘を、うけとろうとしているとき、そこへとびこんできたのはパイ軍曹であった。

「おい、なにをしとるかッ！」

軍曹は、大喝一声、窓のところへ、手をつつこんで、酒壺をおさえた。

沖島と軍曹とが、一本の壺をつかんで、ひっぱりつこである。

「こら、放せ。こんなものを、やっちゃ、いかん。放さんか、うーん」

沖島は、だまっていた。そして壺を、ぐいぐい手もとにひっぱった。

「あつ、うーん」

パイ軍曹は、汗をかいている。沖島は、平気な顔で、その壺を、もぎとった。大力無双の沖島であった。

「いや、どうもありがとう」

復ふっきゆう
仇

そこへ、衛兵がかけつけてきたから、またさわぎが大きくなつた。

人のいいピート一等兵は、パイ軍曹と衛兵との攻撃にあつて、眼をしろくろしている。そして、監房の中の沖島に、早く喰つてのんでしまえと、あいずをした。

沖島は、もちろん、早いところ、監房の中でごちそうを大急行でいただいている。

ピート一等兵が、軍曹の一撃を喰って、そこに、目をまわしてしまおうと、パイ軍曹は、衛兵に命じて、監房を開かせた。

軍曹は、ピストルをかまえて、監房の中へとびこんだ。

「けしからん奴じゃ、貴様は」

「いや、たいへん、ごちそうさまでした」

「貴様には、うんと、おかえしをするつもりじゃった。地底戦車の中で、よくも、ひどい目に、あわせたな。ゆるさんぞ」

「ゆるさんとは、どうするのですか」

「ここで、貴様が立っていらなくなるくらい、ぶん殴なぐってやる

んだ。廻れ右まわ。こら、うしろを向けい」

「うしろを向かなくとも、いいでしょう。私を殴るのなら正面から殴りなさい。遠慮はいりませんよ」

「廻れ右だ。ぐずぐずしていると、ピストルが、ものをいうぞ」
軍曹は、すっかりいきりたつて、本当にピストルの引金をひき
そうである。沖島は軍曹にとびついてやろうかと思つたが、軍曹
との間はすこしはなれすぎている。これでは、仕方がない。沖島
は、おとなしくうしろを向いた。

とたんに、沖島の腰へパイ軍曹のかたい靴の先が、ぽかりと、
あたたつた。

「あッ。うーむ」

沖島は、痛さを、こらえる。

と、また一つ、腰骨のところを、ひどく蹴とばされた。沖島は、ひよろひよろとして膝ひざをついた。

軍曹は、それをみると、いい気になってまたつづけさまに、沖島を、うしろから蹴とばした。

沖島のからだは、ついに、どつとその場にたおれて、長くのびた。

ひどいことをする軍曹である。

そのころ、氷上では、リント少将が、幕僚をひきつれ、地底戦車のまわりにあつまって、しきりに、会議をつづけていた。

「……敵ながら、あっぱれなものだ。三人でもって、よくまあ、

この地底戦車を、ここまでうごかしてきたものだ」

「ではここで改めて、運転いたしましょうか」

「そうだ。うごかしてみろ」

「はい」

参謀の一人が、そこに列ならんでいた七名ばかりの下士官共に、それと号令をかけた。

七名の将兵は、その中に入って、扉をとじた。

しかし、戦車は、いつまでたっても、うごかなかつた。

「どうした。なぜ、うごかさんのか」

エンジンは、一向かからない。戦車長が、扉をあけて、とびだしてきた。そしておどおどしながら戦車の点検をはじめた。

リント少将は、にがい顔だ。

ちようどそのとき、一同は、飛行機の爆音を耳にした。

「おや、飛行機だ。いや、相当の数だが、どうしたのだろう」

と、いつているうちに、とつぜん、氷山の彼方かなたから、低空飛行で

とびだして来た編隊の飛行機、その数は、およそ十四五機！

「へんだなあ。友軍機なら、この前になにかいつてくるはずだ。

これは、あやしい。おい、みんな、その場に散れ！」

と、リント少将は、号令をかけた。

とつぜん現れたこの怪飛行隊は、どこの飛行隊であろうか。

怪機の群むれ

リント少将は、後日、人に話をしているのには、少将の生涯のうちで、そのときほど、おどろいたことはなかったそうである。

その場に散れ——と、とつさに号令をかけた少将は、派遣軍の中で、一等おちついていたといえるだろう。しかも、その少将が、すっかりきもをつぶしたといっているのだ。

それもそのはずだった。

ごうごうと、爆音をあげて、少将たちの頭のうえを、すれすれに通り過ぎた十数機の怪飛行機の翼には、日の丸のマークがつい

ていたのであった。

「ああ、あれは、日本の飛行機じゃないか」

「日の丸のマークはついているが、まさか、この南極に、日本の飛行機がやってくるはずはない」

「でも、日の丸がついていれば日本機と思うほかにはないか」
 将校の間には、はやくも、いいあらそいがおこった。

ところが、いったん、通りすぎた日本機は、すぐまた、引きかえしてきた。

「おい、高射砲はどうした」

「高射砲なんか、あるものか」

「じゃあ、高射機関銃もないのか」

「それは、どこかにあった」

「どこかにあつたじや、間に合わない。総員機銃でも小銃でも持つて、空をねらえ」

と、氷上では、たいへんなさわぎが、はじまつた。なにしろ不意打いうちの空襲である。今もし、そこで、機上から機銃掃射そうしゃか、爆弾でもなげつけられれば、南極派遣軍は、たちまち全滅とならなければならなかつた。

ゆだん大敵とはよくいった。

さあ、こうなつては、空中をねらつたのがいいか。それとも氷のかげで、大の字なりになつてたおれていたのがいいのか、わからない。さわぎは、一層大きくなつた。

日本機は、大たんな低空飛行をつづけてあつという間にとび去った。

氷上のアメリカ兵たちは、そのあとをおいかけて、ぽんぽん、たんたんと、小銃や機銃をうちかけた。日本機が、機銃一つ、うたないのに……。

そんなことで、アメリカ兵の弾丸が、日本機にとどくはずはなかった。

「ちく生^{しょう}。日本機め、うまくにげやがった」

「もう一度、とんでこい。そのときは、おれが一発で、うちおとしてやる」

「だが、日本の飛行機は、なにをするつもりだったんだらうか」

「そりゃ、わかつているよ。わが南極派遣軍がなにをしているか、監視のためにやってきたんだ」

氷上では、アメリカ兵が、つよがりをいったり、いろいろ勝手なことをふいたりしている。

そのうちに、氷上にいたアメリカ機のエンジンが、はげしい音をたててプロペラをまわしはじめたと思うと、一機二機三機四機——五機の飛行機が、氷上を滑走して天空にまいあがった。

「ああ飛行隊の出動だ。これは、おもしろくなつたぞ」

「いやあ、よせばいいのに。五機出発して、五機帰還せずなんてえのはいやだからね」

アメリカ基地を飛びだした機は、五機だった。いずれも四人の

りの偵察機であつた。偵察機だけれど、機関砲を持っていれば、機銃もある。小型爆弾も積んでいるというやつで、偵察機と襲撃機との中間みたいな飛行機である。この飛行機は、ことにスピードがうんと出る。時速五百三十キロというから、ものすごいものである。

さすがにリント少将は、おちついたもので氷上で、一同が色を失つてわいわいさわいできるときに、いちはやく五機に出動を命じたのであつた。指揮者は、マツク大尉であつた。そして一番機にのつていた。

五番機は、一等うしろの飛行機であるが、この上に、パイ軍曹とピート一等兵とがのつていた。のつていたというよりも、のせ

られていたといった方がいい。

もともとこの二人は、地底戦車兵なのであるが、沖島速夫の事件を知っているのも彼等二人であり、助けだされたたった一台の地底戦車のことを知っているのも彼等二人であり、そこへとつぜんとびだしてきた日本機のあやしい行動についても、なにか地底戦車事件と関係がありそうに思われたので、リント少将は、直ちに彼等二人を探しださせて、むりやりに五番機へのせて出発させたわけである。彼等二人は、指揮官マツク大尉に対し、必要なときに、機上から、無線電話を以て、^{もつ}なにか参考になるようなことをいうことが出来るであろう。

だが、おどろいたのは、パイ軍曹とピート一等兵とであった。

沖島速夫の監禁室の前で、二人でいがみあっているところを、急に呼ばれて氷上へ出ると、とたんにおしこむようにして、飛行機にのせられてしまったのである。

二人は飛行機のうえで、たがいにすっかりつかまってぶるぶるふるえている、だがあいかわらず、口だけはへららない。

「パイ軍曹どの、気分は、どうもありませんか」

「うん。正直なところすこし困っている。なにしろ、おれは地底戦車兵であるが、航空兵ではないのだからなあ。お前はどうか」

「はい、もちろん、自分も軍曹どのと、同じことであります。どうも自分は、スピードの早いものは、にが手なんで……。この飛行機は、落ちませんか」

「落ちそうだなあ。地底戦車が落ちた場所とちがって、飛行機が落ちれば、われわれの生命はないぞ」

「だから、自分は、戦車の方が好きなんです。ねえ、パイ軍曹どの。一つ指揮官へ無線電話をかけて、われわれ戦車兵を飛行機にのせるのは違法であるから、この五番機だけ、早く元の氷上へかえしてくださいといってくださいませんか」

「ふん、それはいい。ではそうしようか」

とパイ軍曹が、無線の送話器をとりあげようとしたとき、軍曹が耳にかけていた伝声管の中から、機長の、うわずつたこえがきこえた。

「敵機が見つかった。戦闘用意！」

戦闘用意！

「おい、戦闘用意だよ」

パイ軍曹は、ピート一等兵の脇腹をついた。

「はあ、戦闘用意ですか。どうすればいいのですかな」
たよりない二人だった。

すると伝声管から、また機長のこえが、ひびいてきた。

「早くせんか。ピート一等兵は、後方機銃座へつけ。パイ軍曹は、爆撃座へつけ。早くやれ」

「はい」

機関銃座へつけといっても、飛行機のうえの射撃には経験のな

いピート一等兵だった。またパイ軍曹にしてみれば、機上から爆撃なんて、やったことがない。しかし命令とあれば、つくより仕方がない。

ピート一等兵は、銃座へのぼった。そして始めて、空中のありさまが、はつきり眼にうつった。

前方を、うつくしく編隊をくんだ十五、六機がとんでいく。それはどうやらさつき基地の上を低空飛行でとびさった日本機らしかった。マック飛行隊は快速を利用して今、ぐんぐんと近づきつつあるのだった。

マック大尉ののった指揮機が、翼を左右にふった。

「あれッ。あんなことをして、のんきに、遊んでやがる」

それが指揮機の発した戦闘命令だとも知らず、ピート一等兵は、のんきな解釈をしている。

「戦闘開始。各個にうて！」

機長が、りんりんたるこえで、号令をくださった。

すると、全機は、隼はやぶさのように、日本機の編隊のうえにとびかかっていた。ピート一等兵は、びっくりして、機銃にしがみついた。照準をあわせたり、引金をひくどころではない。

妙な空中戦

「おい、なぜうたないのか。こら、ピート一等兵！」

機長の、おこったようなこえである。

「はい。今、うちます。しかし機長どの。自分は戦車の銃手はつとめました。飛行機の上の射撃はまだ教育をうけておりません。参考書でもあつたら、ちよつと……、ここへ放つてください」

「ばかをいえ。今になって、参考書をよんで間にあうか……。あつ、前に、日本機がいるじゃないか。向うがうたないさきに、おいピート一等兵、うて！」

「困ったなあ。うてといわれても、どうしてねらつたらいいか、困ってしまうではありませんか」

「照準具がついているじゃないか。それを見て、ねらえ」

「この照準具には輪がついていますね、どうするのですか」

「飛行機のスปีドによつて、ちがった輪の上に飛行機の胴をねらうのだ。飛行機はその中心の円に向うようにしろ。一番外の輪が、時速六百キロ、次は五百、次は四百という風に、中心へ来るほど、時速が少なくなつてゐるんだ。わかつたらう」

「わかりませんなあ」

「早く、うて。間にあわないじゃないか。うて、うて何でもいからうて。こつちがうたないと、敵は、こつちに弾丸がないのだと思つて、安心して、第一番にねらわれるからなあ。うて、うて
ツ」

「困ったなあ。——パイ軍曹どの、ここへ来て、自分に代ってうってください」

「いやだ。おれは、おれの持ち場がある。ピート一等兵。はやく、うて！」

「いやになっちゃうな。地底戦車兵に、飛行機のうえで射撃をしろなどと命令するのは、らんぼうな話だ。うてといわれれば、うつが、どんなことが起つても、自分はしらんぞ」

ピート一等兵は、泣き面をして、機銃の引金に指をかけた。

「ええと、あの日の丸をうつか。ええと、こうねらつてと。それから、こういう風に引金をひいてと……」

たたたん、たたたん。

機銃は呻り^{うな}だした。快^{こころよ}い手ごたえが、ピート一等兵の指に……。

「おやつ、おやつ、味方の三番機に命中してしまつたぞ。あれッ、本当か。あらあら、味方の三番機は火に包まれてしまつたぞ。しまつた」

ピート一等兵は、うーむと呻つた。

うつたのはいいが、照準のあやまりで、前をとんでいく味方の三番機のカソリン・タンクをうちぬいてしまつたのである。

「おい、ピート一等兵、おれは見ていたぞ」

と、下からパイ軍曹が、おびやかすようにいった。

「うわーッ、軍曹どの。見ておられましたか。困つたなあ。さつきのは、照準ちがいです。こんどは大丈夫です。見ていてください

い」

ピート一等兵は、失敗をとりもどそうと、またもや照準を定め、引金をひいた。

たたたたん、たたたたん。

ピート一等兵の顔が、土色になった。

こんどは味方の一番機の翼を、うちくだいてしまったのである。マツク大尉の顔だと思いが、操縦席のそばの窓から、こつちをおそろしい眼でにらみつけた。と、思う間もなく一番機は、機首を下にして、ぐらつとゆらいで、^{きり}錐もみになって、^お墜ち始めた。ああ、もう駄目だ。

「ピート一等兵。おれは今のも見ていたぞ」

パイ軍曹が、下からこえをかけた。

「軍曹どの。ここをかわってください。自分がうつと、味方にはかりあたって、損害莫^{ばくだい}大です。たのみます。一つ、かわってください」

ピート一等兵は、そういうと機銃座をからにして、のこのこ下へ下ってきた。

「困った奴じゃな。射撃命中率は、なかなかいいのじゃが、味方をうつちや、しようがないじゃないか、お前は照準をあべこべにやっているから、弾丸が左へいくところが、右へ行ってしまわないじゃないか」

「なんといつても、自分はだめであります。地底戦車兵を、飛行

機にのせるといのが、そもそも始めからあやまっています。軍曹どの。上へあがってください」

「いやだよ。おれはここにいる」

「そういわないで、あがってください」

「いやだ。あとから、おれがやったようにいわれるのはいやだからな」

「困ったなあ」

あわや爆撃

「ピート一等兵。お前にも同情する。いいから、機銃座はあけておけ。そしてここにいてもいいぞ」

「それはいけません。機銃座にだれもついていないなんて、眼にたちますよ」

「なあに、お前が戦死したことにしておけばいい」

「なるほど。しかし戦死はいやですね」

「重傷でもいいなあ。そしておれも重傷だ。どっちも、うごけないというのならいいだろう」

「なるほど、それは名案だ」

「それになあ」とパイ軍曹はもったいらしい顔かおつき付で「さつきか

ら見ていると弾丸をうっているのは、こっちばかりなんだ。日本機は、どういうものか、一発もうってこないで、ひらりひらりと逃げまわってばかりいるのだ。だから、向うがうってくるまで、こつちでもうたなくていいんだ。どうだ、おれはなかなかおちついて、物事をよく見ているだろう。えへん」

パイ軍曹は、ちよつぴり鼻をうごかしてみせた。

ピート一等兵はそれをいいことにして、パイ軍曹のそばにすわりこんでしまった。

そのうちに、僚機の機銃のうち方が、きこえなくなった。

「ああパイ軍曹どの。射撃をしなくなりました。どうしたのです。ようかなあ」

「さあ、どうしたかなあ。察するところ日本機は全部、うちおとされたのかもしれないぞ」

パイ軍曹は、景気のいいことをいった。

「そうですねあ。急に、こつちがつよくなつたんですね」

「お前みたいな下手へたくそな射手ののつているのは、この飛行機だけだ。他のやつは、元来航空兵なんだから相当に射撃には自信があるはずだ。ついに、ぽんぽんとやつつけたんだろう」

「下手くそだといつても、自分は元来地底戦車兵なんですからね。それは仕方がありませんよ」

「それは大したいいわけにならないよ」

「え、なぜです」

「あれを見ろ」

「えっ」

「下を見ろというんだ。あそこの氷上に見えてきたのは、日本軍の基地にちがいない。今おれが爆弾をおとしてみせるから、よく見ている。おれはお前とちがつて、うまく命中させてみせるぞ。」

同じ地底戦車兵でもパイ軍曹はかくのとおり、空中勤務にまわされても、腕はたしかだというところを今見せてやる」

「えへ、本当ですか」

「本当だとも。この爆撃照準器の使い方は、ちよつとむずかしいんだが、おれはかねて、こんなこともあろうかと、あらかじめ研究しておいたのだ。こういう具合にやるんだ。ええと、もすこし

右へまわして……いや、いきすぎた左へまわして、この目盛を、こっちの零れいに合わしてと……これでいい、そこで、二つの数字が合ったところで、爆弾を支えている腕金はずせばいいんだ。一チ、二イ、三ン！」

「あつ」

ピート一等兵は思わずこえをだした。パイ軍曹が、ついに爆弾を切って放したとおもったのである。——ところが、どうしたわけか爆撃の直前にいって、パイ軍曹は、

「うーむ」

と呻って、把手はしゆから手を放してしまった。

「パイ軍曹どの。どうせられましたか」

「いかんわい。やめたよ」

「なぜ、やめられましたか」

「下に見えているのは、日本軍の基地だと思っていたが、よく見ると、何のことじゃ。さつきまで、おれたちのいたアメリカ基地だったのじゃ。とんだ間違いを、やらかすところじゃった。もうすこしでリント少将閣下を爆撃するところだった。いや、あぶなかつた」

「へえ、あぶないことでしたな」

「基地へかえつてきたことを、おれたちにおしえてくれないから、いかんのだ」

「しかし軍曹どの。機長から命令もないのに爆撃をするから、こ

ういう間違いがおこるのですぞ」

「なにを。お前は、だまれ。上官にむかってなにをいうか」

「へーい」

パイ軍曹は、自分の失敗に、てれくさくなつて、ピートにあたりちらした。ピートこそ、いい面つらの皮かわだった。そのころ、機は高度をだんだん低めて、着陸の用意にかかっていた。

基地上空を一周すると、さらに高度は低くなつた。氷原が、下からむくむくともりあがつてくるように思った。エンジンの音が、急におちて、機はさつと氷原に下りて、小さく跳はねた。

二機撃墜げきつい

「三機帰還せず！」

基地へかえってきたのは、たった二機だけであった。

飛行隊長は、司令の前に、めんぼく面目なさそうに、あたまを下げた。

「三機の情報について、知るところをのべよ」

司令はふきげんである。

パイ軍曹は、ピート一等兵のよこつばら横腹をついた。ピート一等兵

は、目を白黒した。例のことが、ばれては、たいへんだ。

「はい。壮烈なる空中戦の結果、墜落したようであります。われ

われも、戦闘中でありましたため、はつきり、その先途を見届け
ることが、できませんでした」

隊長は、うまいことをいった。ピート一等兵は、やれやれと胸
をなげおろした。

司令は、これをきいて、うなずき、

「おお、そうか。そして、戦闘の結果は、どうであったか。撃墜
数を報告せんではないか。撃墜状況はどうか」

「はい。撃墜は、ありません」

「なんだ、撃墜はないというのか。これだけの犠牲ぎせいをはらって、

撃墜は一機もなしというのか。お前たちは、それでもアメリカ飛
行隊の勇士か。よくまあ、はずかしくないことだ」

司令は、またまたひどくふきげんになった。

司令の、がながんいうのをきいていたピート一等兵は、おもわず、興奮した。

「司令。自分は撃墜しました」

「おお、お前はピート一等兵だな。それはでかした。何機撃墜したか」

パイ軍曹は、おどろいて、ピート一等兵の服をひっぱった。が、もう間にあわない。

「はい。あもう、二機であります」

「おお、二機も、やつつけたか。それは拔群ばっぐんの手柄てまがじゃ。よし、

あとで、褒美ほうびをやろう。昇進も上申してみるぞ」

ピート一等兵がうちおとしたのは、日本機ではなく、味方の飛行機であることを、司令は、知らないものだから、いやにピートをほめあげ、そして上きげんになった。

横にきていたパイ軍曹は、おどろいて、ひとごとながら、もう気がとおくなって、ぶったおれそうであつた。司令が、本当のことをしつたら、ピート一等兵は、どんな重い懲罰ちようばつをくうかしれない。大嵐の前の静けさとは、まさにこのことだ。いくら、これまでいじめてきた部下ではあつたが、彼のうえに、これから下るであろう懲罰をかんがえると、全くかわいそうでならなかつた。そのとき、司令がさげんだ。

「勇士。ピート一等兵。五歩前へ」

ピート一等兵は、えらそうな顔をしてのこの前へ出ていった。パイ軍曹は、心臓がいたくなつた。

「ピートのやつ、どこまで、ばかな奴だろう。いよいよ大嵐のはじまりだぞ」

すると司令は、

「勇士ピート一等兵。二機撃墜のときの状況をのべよ。まず聞か、お前が、撃墜した日本機はいかなる機種のものであつたか」

「え、日本機?……」

ピート一等兵は、ようやく気がついた。

（あつ、しまった。こいつはとんだことを喋しゃべってしまったぞ。撃

墜といつたのだから、とうとう敵味方の区別をわすれて、喋しゃべつて

しまった)

さあ、こまった。

「順序をたてないでよろしい。はなしやすいように、はなせ」

「うわーッ」

ピート一等兵は、へどもど……。

しかし、ピート一等兵は運がつよかった、というのであろう。

そのとき、とつぜん、思いがけないさわぎが起った。司令のそばへ副官がとんできたのだ。

「おお、飛行司令。リント少将は、こつちに見えていないか」

「リント少将？ 閣下は、こつちへ来ておられません。どうかしましたか」

「いや、一大事だ。さっきのさわぎのうちに、リント少将の姿が、急に見えなくなったのだ。もう、しらべるところは、全部しらべた。困ったなあ。君のところも、もう一度、念入りにしらべてくれたまえ」

「はい、承知しました」

一大事である。飛行隊員は、総動員で、附近をさがすこととなった。——そしてピート一等兵は、味方をうったことが、司令に知られそうになり、あやういところで、たすかった。

ところが、そのころ、氷の中の監房でも、ふしぎな囚人紛失事件が、もちあがっていた。監房の前では、衛兵と折から又そこへ下りてきたパイ軍曹とが、声高にあらそっている。

「冗談じゃありませんよ。パイ軍曹どの、はやく囚人をかえしてください。黄いろい幽霊を……」

「わしは、知らん」

「わしは、知らんじゃ、困るじゃありませんか。軍曹どのが、監房の扉をあけて、囚人を引っぱりだしたのですぞ。それから、ピストルでおどかしたり、靴で、けとばしたりしたではありませんか」

「けとばすわけがあったから、やったまでだ。そんなことについて、貴様のさしずはうけない」

「さしずをしているのではありません。黄いろい幽霊を、かえしてくださいと申しているのです」

「わしが、そんなことを知るものか。囚人の番をするのは、貴様ら衛兵の仕事じゃないか」

「ああ、それはひどい。軍曹どのが、囚人を自由にしておきながら……」

「なにを云う。上官に対して無礼者め」

といったかと思うとパイ軍曹は、らんぼうにも、衛兵のあごに、てっけん鉄拳をガーンとうちこんだ。衛兵は、悲鳴をあげて、その場におおれてしまった。

そのころ、氷上ではリント少将の姿をもとめ、ますますさわぎが大きくなった。

「どこにも、おられないじゃないか」

「ふしぎなこともあるものだな」

「おや、もう一つ紛失したものがあつた。ここにあつた」

「何がなくなつた？」

「地底戦車が、どこかへいつてしまつた」

「地底戦車？ そんなばかなことが……」
 といひながらそこを見
 ると、なるほど地底戦車がない。

「一体、これはどうしたんだ」

「うむ、これは、容易ならぬ事件だ」

三つの紛^{ふん}失^{しつ}事件

リント少将が行方不明となる。

囚人の沖島速夫が、いつの間にかどこかへにげだしてしまった。そこへもつてきて、氷上においてあった地底戦車が、紛失してしまつた。

三つの紛失事件が、同時に起つて、アメリカ基地は、上を下への大きわぎであつた。

リント少将は、どこへいったのであろうか。それから沖島速夫は、どこへかくれているのであろうか。それから地底戦車はどうしたのか。

地底戦車は地上のさわぎをよそにして、このとき、氷の下ふかくしずかに巨体をよこたえていたのであった。地底戦車の中で、向いあつて座っている二人の人物があつた。

「……少将閣下。乗り心地は、いかがですか」

そういつているのは、外ならぬ沖島速夫であつた。三つの紛失物——リント少将に沖島に地底戦車の三つは、みんな一つところにかたまっていたのだ。

少将は、にが虫をかみつぶしたような顔をしている。

「……君が余に要求するものは何か。なにが、ほしいのか。早く、それをいえ」

「少将閣下、お考えちがいをなさらないように。私は閣下からな

にを、ちようだいしようとも思わないのです。ただ、地底戦車の乗り心地をうかがっているだけです」

沖島速夫は、えらいことを、やってのけた。日本機の襲来さわぎがはじまると、彼はわれにかえった。さわぎのため、監房の入口はあいたままで、番をしているものはない。今だと思った彼は、氷上へとびだしたのだ。そして、とつさに思いついてリント少将を地底戦車の中へさそいこみ、缶詰にしてしまったのだ。そして早いところ氷の中へもぐってしまったのだ。そのとき彼は、一つのすばらしい計画をおもいついていたのだった。

「……早くいつてくれ。何でも、君の要求にしたがう。だから、外へ出してくれ」

「外へ出せといって、今はもう、氷の中に入っているのです。おのぞみなれば、このまま海底ふかく、墜落してみてもいいのです」
「もうわかった。君は、余を、不名誉きわまる捕虜ほりよとしたうえ、東洋流の、ざんこくなる刑にかけようというのだな」

「ざんこくは、東洋よりも、むしろ閣下の国で、さかんに行われているではありませんか——しかし、そのように、外へ出たいといわれるなら、出してさしあげましょう。しばらく待っていただきましょう」

沖島速夫は、どこまで胆たんりよく力がすわっているのか、ゆうゆうと、リント少将に対しているのだ。

地底戦車はどこへ

沖島速夫は、操縦席にのぼると、地底戦車を、ぎりぎりど、前進させ始めた。

計器の針が、一どにうごきだした。

囚われのリント少将は、^{とら}

(この小僧め)

と、沖島のうしろからピストルをつき出そうとしたが、思い出して、そのまま引込めた。いくらここで、ピストルを向けてみて

も、何にもならないのであった。なぜならば、沖島を撃つて傷つけると、あとは誰が、この地底戦車をうごかすのか。リント少将は、ピストルをにぎって勝ってみるのはいいが、少将は、やがてこの戦車の中で、飢えと寒さのため死んでしまふだろう。沖島をピストルで撃つことは、この地底戦車の中を自分の墓場とすることだと気がついたリント少将は、せつかく出したピストルを、引込めなければならなかったのである。

「今に、氷上へ、お出しいたしますよ。もうしばらくのご辛抱しんぼうです」

沖島は、ゆうゆうと操縦のハンドルをにぎっていた。

（全く、ピート一等兵は、かわいい男だ。空襲さわぎのとき、パ

イ軍曹のすきを見て自分のうしろへ、この私をかくし、そして氷上へ出してくれたからな。そのおかげで、自分はいよいよ機会にリント少将を、戦車の中に缶詰にして、とつさに氷の下へもぐりこんだわけだが、まるで神さまがまもってくださるようにな、とんとん拍子にいったじゃないか！)

沖島は、のん気に、そんなことを、思い出していた。

地底戦車は、ごっとな、ごっとなと、ゆるやかに、氷の中を縫^ぬっていった。

その氷の上では、幕僚以下が、いよいよ青くなって大搜索をしているのであった。だが、さつぱり手がかりがない。そうでもあろう。地底戦車がはいりこむときにあけた氷上の穴は一時水がた

まっているがさむさのため、たちまち凍りこおついてしまって、穴は元どおりにふさがってしまったから、どこから地底戦車が入りこんだのか、ちつとも見たところでは、分らないのであった。

地底戦車の中では、沖島速夫が、地図をにらんで、しきりに、しるしをつけていたが、

「さあ、いよいよ氷上に出ますから、御安心ください」

と、少将の方へあいさつをした。それとともに、地底戦車は、先がぐつとあがり、ぎりぎりと、斜めにのぼり始めた。

「もうすぐです。ちよつと、御覧ごらんに入りたいところへ出ますから、そのおつもりで」

一体、沖島は、地底戦車を、どこへ顔を出させるつもりである

うか。

やまとせつげん
大和雪原

地底戦車は、大きくゆれると、水平にもどつて、それから間もなく、エンジンが、停とまつたのであつた。沖島は、操縦席をはなれて、出入口の扉に近よつた。

リント少将は、この中に取り残されてはたいへんと、沖島のあとを追つて、彼の腰にだきつかんばかりである。

「リント少将閣下。日本人は、あくまで紳士的ですから、どうぞ御心配なく」

そういつて、彼は、扉を、がらがらとあけた。外から、さつと、まぶしい光線が、はいつてきた。

「さあ、少将閣下から、お先にお出てください。この中に、あなたを閉じこめるようなペテンはいたしませんよ」

リント少将は、いわれるまでもなく、まっ先に、戦車の外にとび出した。彼は、そこで、さつそく部下をよびあつめ、このらんばんうきわまる黄いろい幽霊を、とりおさえさせるつもりだった。

だが、それは、少将の思いどおりには、いかなかった。

「あつ、ここは……」

リント少将は、そういつて、ぼうぜん呆然と氷上にたつて、あたりを眺めまわした。

あたりは、彼の部隊が屯たむろしているところとは、ちがう。まず、氷山のうえに、ひらひらとひるがえる日章旗が、リント少将をその場に、すくませてしまった。

「どうです、お分りですか。ここが、どこであるか」

「うむ」

「お分りのはずですが、私が、説明しましょうか。ここは、大和雪原です。西暦でいつて千九百十二年、大日本帝国の白瀬しらせ中尉がロット海を南に進んで、この雪原に日章旗をたてたのです」

「大和雪原。それなら知っている。ああ、しかしいつの間に日章

旗が……おお、そして、いつの間にあのように飛行機が……」

と、リント少将は、氷上に翼をやすめている飛行機の群を発見して、おどろきの声をあげた。

「いや、別におどろかれることは、ありますまい。ここは、わが大日本帝国の領土であるがゆえに、飛行機がいても、ふしぎではないのではありませんか。わが日本人は今や、世界第一の飛行機乗りになったのです。内地から、こんなところへ飛んでくるのは、なんでもありません。丁^{ちようど}度地底戦車については、貴国が世界一であるのと、似たようなものです。では、少将閣下、大和雪原の日章旗をどうぞお忘れなきように、そしてここで活躍をはじめようとする日本人たちを妨害なさらぬように、私から、とくにお願

いいいたします。さつきもありましたが、日本機が、弾丸を一発も
うたないのに、アメリカ機が、機銃をうって、挑戦してくるなど
ということは、もうおやめください。そっちの御損ですからね」
「うーむ」

「では、この地底戦車によつて、閣下を、再び司令部のあるテン
ト村へお連れいたしましょう。永々、この地底戦車をお借りして
いまして、どうもありがとうございます」

沖島速夫は、そういつてリント少将に対して、いんぎんに礼を
のべたのであった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第6巻 太平洋魔城」三一書房

1989（平成元）年9月15日第1版第1刷発行

初出：「ラヂオ子供の時間」（「地底戦車兵の冒険」のタイトルで。）

1940（昭和15）年2月～

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

地底戦車の怪人

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>